

築館町文化財調査報告書第3集

# 伊治城跡

—平成元年度発掘調査概報—



平成2年3月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第3集

# 伊治城跡

—平成元年度発掘調査概報—

平成2年3月

築館町教育委員会

## 序　　言

伊治城が築館町城生野に擬定されてから大分久しくなります。とくに宝龜の乱は国政を動かす大事件であり、その後の政府と土着人との約30年に亘る抗争の発端となるものであります。

当教育委員会は昭和62年以来城生野地区の発掘調査を進めてその解明につとめてまいりました。

昨年度の調査で二重の溝が確認された結果、本年度の調査において建物跡の存在を期待していましたが、予測どおりに5棟の建物跡が検出され、いずれも古代のものであることが確認されました。これを手がかりに今後の調査が伊治城の解明に大きく前進することが期待されます。

この調査に当って指導協力をいただきました文化庁・県文化財保護課・多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館及び地元の方々に心から感謝を申し上げ、さらに今後のご指導ご協力をお願い申し上げます。

平成2年3月

築館町教育委員会教育長

千葉　與一郎

## 例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町に所在する伊治城跡の平成元年度発掘調査概報である。
2. 本書には、下記の調査成果を収録した。

調査次数	調査期間	調査面積	内　容
第10次調査	平成元年4月11日～6月1日	480 m <sup>2</sup>	宅地現状変更に伴う事前調査(国庫補助)
第11次調査	平成元年7月21日～11月22日	1,200 m <sup>2</sup>	国庫補助事業計画にもとづく調査
第12次調査	平成元年9月5日～9月16日	1,700 m <sup>2</sup>	通学路整備事業に伴う事前調査
第13次調査	平成元年10月16日～11月10日	1,960 m <sup>2</sup>	農道整備事業に伴う事前調査
第14次調査	平成元年11月29日～12月8日	170 m <sup>2</sup>	水道管理設に伴う立合調査

3. 図版の作成ならびに本書の執筆・編集は、築館町教育委員会社会教育課文化財保護係上事青原祥夫が担当した。
4. 遺物整理作業には、臨時職員若生志津子・氏家順子の協力を得た。
5. 地区割は、城生野公民館前の任意の点を発掘基準点として定め、この点を原点(0.0)とする直角座標を組んで割り出している。発掘基準線の南北軸は、N 2°-08'-08" W(Nは第X系座標北)である。
6. 第4図に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1/5万の地形図を複製して使用した。
7. 造構略号は次のとおりで、各造構ごとに番号を付した。  
S A :柱列跡 S B :建物跡 S E :井 戸 S X :その他の造構  
S I :堅穴住居跡 S K :土 壤 S D :溝
8. 遺物略号は次のとおりで、各遺物ごとに番号を付した。  
A :繩文土器 B :弥生土器 C :土師器(ロクロ使用)  
D :土師器(ロクロ不使用) E :須恵器 F :丸瓦・軒丸瓦  
G :平瓦・軒平瓦 K :石製品 N :金属製品 S :硯
9. 土層の色調は、「新版標準土色帳」(小山・竹原:1970)の基準にしたがって記載した。
10. 調査成果の一部は、既に現地説明会や第16回古代城柵古跡遺跡検討会で公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。
11. 調査によって得られた出土遺物、ならびに調査の記録・図面類は、築館町教育委員会で一括して保管している。

## 調査要項

1. 造跡名 伊治城跡（宮城県遺跡登載番号：41007）  
2. 所在地 宮城県栗原郡築館町字城生野  
3. 調査主体 築館町教育委員会（教育長 千葉與一郎）  
4. 調査担当 築館町教育委員会 社会教育課  
5. 調査員 宮城県教育庁文化財保護課 主査 手塚均  
技師 菊地逸夫、伊藤裕、加藤明弘、岩見和泰、  
大和幸生  
築館町教育委員会社会教育課 主事 菅原洋夫  
6. 調査協力 新井武郎、千葉けきよ（地主）、白鳥測量設計事務所、伊藤建設  
7. 調査参加者 千葉 力雄、千葉 寿児、千葉 春治、高橋 佐一、加藤 すえ、  
菅原 光男、菅原 永松、桑島 雪夫、伊藤 耕二、高橋 篤一、  
佐藤千喜男、佐藤 喜作、狩野 養治、小野 勘一、尾形 忠市、  
三塚 正道、白鳥 保守、佐藤 咲大、  
8. 調査・報告書作成指導・協力 宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、進藤秋輝、白鳥良一、真山悟（宮城県教育庁文化財保護課）、桑原滋郎（宮城県多賀城跡調査研究所）、藤沼邦彦、加藤道男、山田晃弘（東北歴史資料館）、八木光則（盛岡市教育委員会）、工藤雅樹（福島大学文学部）、小松正大（秋田城跡調査事務所）、河原純之（文化庁記念物課）、金野正（宮城県文化財保護地区指導員）

## 目次

序 言	第11次調査	15
例 言	第12次調査	35
調査要項	第13次調査	37
I 造跡の概要とこれまでの調査成果	第14次調査	49
II 造跡の位置と現状	V 考察	50
III 周辺の遺跡	1. 各造構の特徴と問題点	50
IV 伊治城および 栗原郡に関する古代史年表	2.まとめ	55
V 発見された遺構と遺物	参考引用文献	56
第10次調査	写真図版	57

## I 遺跡の概要とこれまでの調査成果

伊治城は律令政府が神護景雲元年（767）に陸奥国経営の一環として、現在の宮城県北の内陸部にある栗原地方に設置した城柵である。文献には延暦15年（796）までの約30年間、この城柵に関する記録が登場する（IV参照）。なかでもこの地域の首長であった伊治皆麻呂が、宝亀11年（780）にこの城柵で按擦使紀広純を殺害し、さらに国府多賀城に攻め入って府庫の物を奪取・放火した事件は当時の政府に大きな衝撃を与えた。

この伊治城跡の所在地については、本遺跡がその最も有力な擬定地とされ、様々な検討が加えられてきた。なかでも宮城県多賀城跡調査研究所による発掘調査は、本遺跡の年代観や構造を知る上で大きな成果をあげている（宮城県多賀城跡調査研究所：1978～1980.3）。この調査では、北辺の外部施設が土塁と大溝で構成されていること、また当時遺跡内には多数の堅穴住居跡が営まれたことが明らかとなった。さらに「城厨」と墨書きされた土器が出土したことから、この一帯に城にかかる厨の施設が存在していたことが明らかとなった。しかし、政府跡や官術ブロックなど城柵の主要な箇所が未発見で、この遺跡を伊治城跡と確定するための決め手を欠いていた。

ところで近年、本遺跡の所在する城生野地区一帯には開発の波が押し寄せ、徐々にではあるが発掘可能な土地が狭められている。このため、本遺跡が伊治城跡であることを一刻も早く確定し、具体的な保存対策を構ずる必要性が生じてきた。そこで築館町では関係諸機関の指導をおおぎ、昭和62年度から5ヶ年計画で発掘調査を実施している。

本年度は昨年度の調査で検出されていた区画溝のひろがりと、その内部に配置された遺構群の解明を目的として調査を実施した。その結果、整然と建ち並ぶ5棟の建物跡が検出され、この一帯が計画的に建物群が配置され、その周囲を二重の溝で方形に区画していた一画であることが明らかとなった。この成果からこの場所は伊治城跡のなかでもさわめて重要な一画とみられ、その性格としては政府跡の可能性もある。築館町では今後この一帯を集中的に調査し、具体的な内容を明らかにして行きたいと考えている。

年 度	町 負 担	県 負 担	国 負 担	総 額
昭 和 62 年 度	50万円	50万円	100万円	200万円
昭 和 63 年 度	100万円	100万円	200万円	400万円
平 成 元 年 度	125万円	100万円	225万円	450万円

## II 遺跡の位置と現状

本遺跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城跡の北約52kmの位置にあり、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

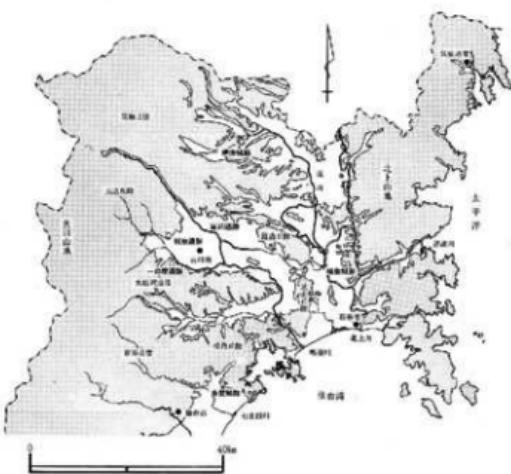
宮城県北部の地形をみると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山地が南北に大きくよこたわっている。この奥羽山地は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分岐している。本遺跡はその最も北に発達した築館丘陵の末端部と接する河岸段丘上に立地する。

この段丘は周囲を河川、丘陵末端部、さらに小さな谷で囲まれ、独立した地形をなしている。本遺跡の範囲はこの段丘のほぼ全域と推定される。その規模は、東西が約700m、南北は、南辺の位置を唐崎地区と地蔵堂地区を画する沢のあたりと考えれば、約650m、一迫川と国道4号線が接するあたりと考えれば、約900mとなる。上面には黄褐色の火山灰層が厚く堆積し、縁辺には周囲との比高差が約6mほどある段丘崖が各所で認められる。現状は、100戸を越える住宅が点在し、それ以外の箇所は、主に水田・畑地として利用されている。

現在残っている遺構としては、台地北斜面に東西にのびる空堀状の大溝があり、さらにその北には、これに接してはしる土壠状のわずかな高まりがある。これらは古代において、伊治城の外郭線を構成していたことが宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査（宮多研：1978.3）によ



第1図 東北地方の主要な城柵

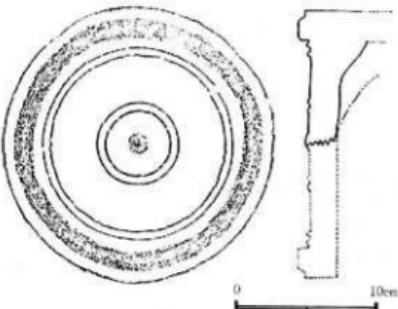


第2図 宮城県北部の地形と古代城柵・官衙遺跡

って認められている。また地元住民の話によると、かつては台地西斜面においてもこれと同じ遺構が残っていたらしい。しかしながら、開田と鹿島堰の改修のために旧地形は失われ、現在その所在を確認することはまったくできない。

遺物の散布は台地上のはば全面にわたって認められる。その多くは須恵器と土師器が占めており、このなかでも須恵器の量は圧倒的に多い。また、瓦の分布も唐崎地区を中心にわずかながらも認められる。

ところで昭和40年代の前半に、この台地の各所では大規模な開田工事が行われ、その際には多量の遺物が出土した。照明天守の住職であった故松森明心氏が精力的に収集したこれらの遺物は、現在、町指定文化財として一括して保管されている（築館町文化財保護委員会1969・1970.3）。広大な面積のうちまだごくわずかの調査しか終了していない現在、遺跡全体の概



第3図 松森氏採集重圓文軒丸瓦

要を知る上で、これらは貴重な資料となっている。さて、それによれば、この台地一帯から出土した遺物は、そのほとんどが8世紀末を中心とした1時期のものに集中している。このことは、これまでの発掘調査（宮多研：1977～1979.3）で発見された多数の住居跡の年代観と一致しており、伊治城の存続期間を考える上で興味深い。また、この松森氏収集の遺物の中には重圓文軒丸瓦がある（第3図）。これは多賀城第Ⅱ期（8世紀中頃～780）の所用瓦と同一の文様意匠である。

### III 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、年代的に近接する奈良・平安時代の遺跡が多い。そのいくつかは、既に圃場整備事業、東北自動車道の建設などに伴って発掘調査されている。これらの遺跡は、本遺跡と直接あるいは間接的に関連すると思われる所以、ここでは、その主なものについて紹介しておきたい。

糠塚遺跡は、本遺跡の東約4.5kmの舌状台地上にある。約6,000m<sup>2</sup>の調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡が30棟検出された。奈良時代の住居跡から出土した土器は、宮城県北地方における国分寺下層式の基準資料となり得るものである（小井川・手塚：1978.3）。

山の上遺跡は、本遺跡の南約2.5kmにある。前述の糠塚遺跡と同じ奈良時代（国分寺下層式

期)の住居跡が3棟検出された(手塚:1980.3)。

また、本遺跡の東約4kmにある大門遺跡でも、奈良時代の住居跡が1棟、それに平安時代の住居跡が1棟検出されている。

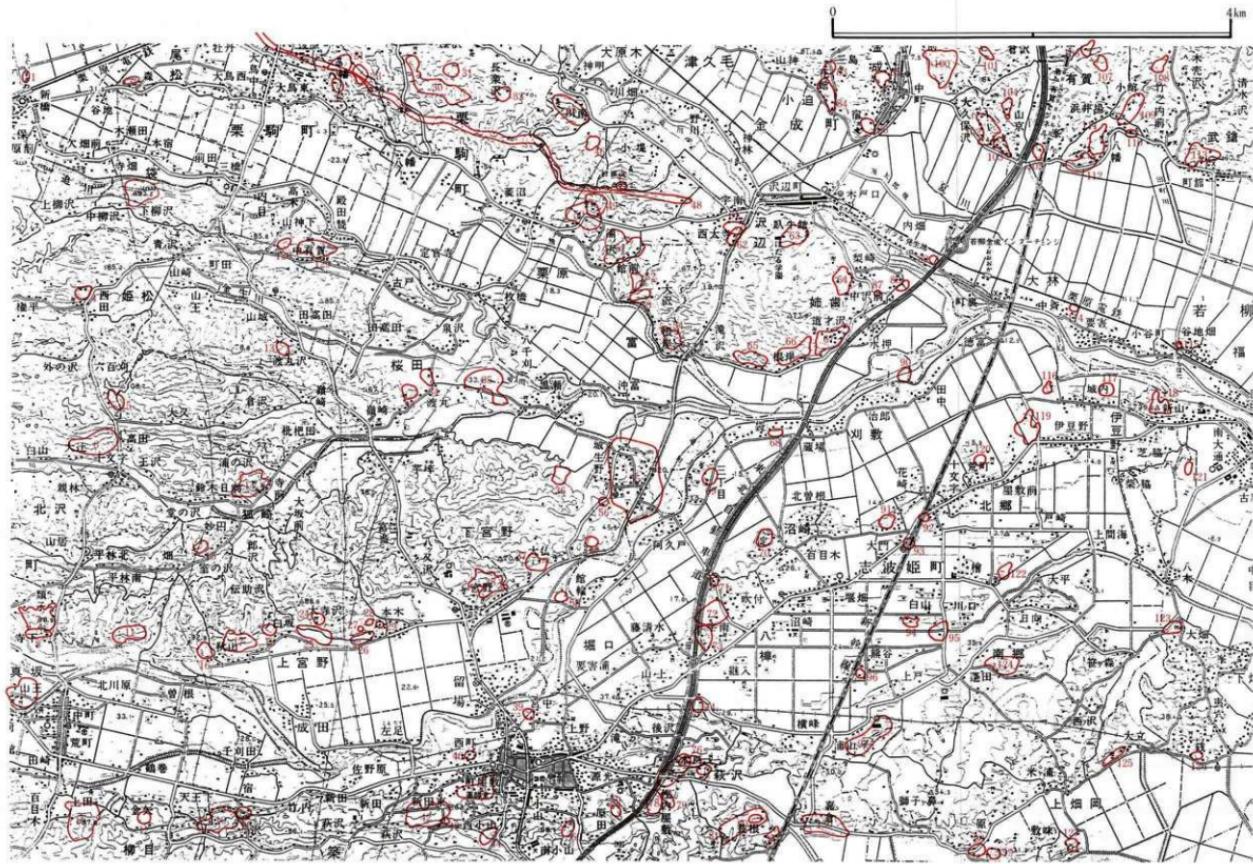
御駒堂遺跡は、本遺跡の南約2kmにある。調査の結果、41棟の住居跡が検出された。これらは出土土器の検討から、5群に大別され、それぞれ7世紀末ないし8世紀初め、8世紀前半、8世紀後半、9世紀初頭の年代が与えられている。この遺跡でとくに注目されるのは、8世紀前半の段階において、関東系の土器が使用され、また住居構造の点においても関東地方との関連が認められることである。このことについては、関東地方からの人間の移住が想定されており、また、その背景として政治的な意図がはたらいていたと予想されている(小井川・小川:1982.3)。栗原郡の越郡一神護景雲元年(767)以前に、このような事実が存在していたことは東北地方における律令体制の浸透過程を考える上で、きわめて重要なことと言わねばならない。

また、発掘調査によるものではないが、本遺跡の東約4kmには、開田工事の際にヘラ切り無調整の須恵器壺等が出土した、狐塚遺跡がある。この遺跡は窯跡と考えられ、本遺跡に製品を供給した可能性がある(金野・佐藤:1976.3)。

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	尾松遺跡	丘陵地	古高地	奈良・平安	25	白波城跡	丘陵地	城跡	中後・近世
2	鳥居城(山根城)	丘陵地	分水嶺	古高地	26	小野城跡	丘陵地	城跡	奈良・平安
3	及布立ヶ城	丘陵	丘陵地	古高地	27	二ノ宮遺跡	丘陵地	城跡	绳文
4	片平沼遺跡	丘陵	丘陵地	中後	28	一ノ宮遺跡	丘陵地	城跡	绳文・弥生(中)
5	猪俣城跡	丘陵	丘陵地	古高地	29	木木城跡	丘陵地	城跡	绳文・弥生(中)
6	田中城跡	丘陵	丘陵地	中後	30	桑穴城跡	丘陵地	城跡	绳文(?)・奈良・平安
7	豊成城跡	丘陵	丘陵地	中後	31	猪俣城跡	丘陵地	城跡	中後
8	雄武寺西洞(古墳群)	丘陵地	古墳(?)	古墳(?)	32	片瀬寺跡	丘陵	寺跡	――
9	国史跡	丘陵地	古墳(?)	古墳(?)	33	中島遺跡	丘陵地	城跡	平安
10	八幡山古墳	丘陵	古墳	古墳	34	泉沢八幡跡	丘陵地	城跡	奈良・平安
11	町松城跡(船越)	丘陵地	城跡	平至・中後	35	長者原遺跡	丘陵	城跡	绳文(?)・奈良・平安
12	金次森里	丘陵	古高地	古高地	36	藤切長板遺跡	丘陵	城跡	布良
13	田高田跡	丘陵	城跡	中後	37	油沢城跡	丘陵	城跡	奈良
14	鶴ノ木曾所跡	丘陵	古高地	奈良	38	吉野城跡	丘陵	城跡	中後
15	菅原日枝城(立野古墳)	丘陵	城跡	中後	39	西館遺跡	丘陵地	城跡	弥生・中後
17	江坂城跡	城跡	城跡	中後・近代	40	吉野遺跡	丘陵地	城跡	奈良・平安
17	秋山城跡	城跡	城跡	中後・近代	41	風神山北遺跡	丘陵地	古墳(?)	――
18	那摩寺所古墳群(白野古墳)	丘陵地	古墳	古墳(?)・奈良・平安	42	第8箭城跡	丘陵	城跡	中後・近世
19	佛母跡	丘陵	古高地	奈良	43	丹下鉢下遺跡	丘陵地	城跡	绳文
20	妙教寺遺跡	丘陵地	古高地	绳文	44	小山遺跡	丘陵地	城跡	绳文
21	丸城(麻屋跡)	丘陵地	城跡	中後	45	大原木城跡	丘陵地	城跡	绳文・中後(?)
22	丸城遺跡	丘陵地	古高地	绳文	46	龍崎遺跡	丘陵地	城跡	绳文(中)
23	丸城(伏牛城)	丘陵	城跡	(空町)	47	糸田山寺遺跡	丘陵地	城跡	绳文・中後
24	赤沙門古墳群	丘陵地	古墳	古墳(?)・奈良・平安	48	八幡上寺跡	丘陵地	城跡	――

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
19	飛車寺跡	丘陵地	包含地	平安	90	高教治跡	郊邊地	包含地	绳文(晚)・平安
30	尾松塚跡	丘陵地	包含地	奈良・平安	91	竹ノ内遺跡	内地	包含地	绳文
51	栗原城跡	丘陵地	丘陵	中世	92	大門遺跡	*	集落跡	奈良・平安・中世
52	新山神社跡遺跡	*	包含地	绳文	93	*	*	*	*
53	大沢横穴古墳群	丘陵地	横穴古墳	古墳(後)・奈良・平安	94	孤塚遺跡	*	包含地	奈良・平安
54	高城跡	丘陵地	城	中世・近世	95	*	*	*	*
55	伊波城跡	丘地	城	古跡	96	猪谷遺跡	*	集落跡	绳文・古代
56	其内田村遺跡	丘陵地	包含地	奈良・平安	97	浦山館跡	丘陵	城	中世
57	大仁古墳群	丘陵地	古墳	奈良・平安	98	平箱跡	分层地	城	中世・近世
58	守宿遺跡	丘陵地	包含地	绳文・弥生(中)	99	原見塚跡	分层地	貝冢	绳文(晚)
59	原見遺跡	丘陵	集落跡	绳文(中)・奈良・平安	100	金成城跡	丘陵	城	中世(室町)
60	高田山遺跡	台地	包含地	绳文	101	金沢遺跡	*	包含地	绳文
61	西岸跡	丘陵	城	中世	102	鳥見城跡	*	城	近世
62	西大寺十三塚	*	十三塚	绳文(中)・(近世・室町)	103	大久保跡	*	包含地	奈良・平安
63	西大寺跡	丘陵	城	中世	104	猪ケ鼻城跡	*	城	中世・近世
63	梨崎塚跡	*	塚	中世	105	若草原遺跡	丘陵	集落跡	奈良・平安
65	鈴魚横穴古墳群	丘陵地	横穴古墳	古墳(後)	106	舞山遺跡	丘陵	包含地	绳文
66	(古墳・城跡)	丘陵	城	平安(後)	107	輕石城跡	*	城	中世・近世
67	大製塙跡	*	城	中世	108	木光沢遺跡	丘陵地	包含地	绳文(前)
68	刈谷塚遺跡	自然防	包含地	绳文	109	田子高塚跡	丘陵	城	中世・近世
69	刈谷塚跡	自然防	城	中世	110	葛實沢遺跡	*	包含地	绳文・奈良・平安
70	日良塚跡	丘地	城	中世	111	八幡遺跡	*	包含地	绳文(前・中)
71	猪ノ丸遺跡	*	城	知(绳文)	112	黄骨塚跡	*	城	中世
72	牛山遺跡	*	城	绳文(中)・(後)	113	武東・西塚	*	城	中世
73	御勝堂遺跡	*	包含地	古墳・奈良・平安	114	大林遺跡	自然地	城	中世・近世
74	山ノ上遺跡	*	包含地	奈良	115	裏岡地跡	自然地	城	中世・近世
75	木戸遺跡	*	集落跡	绳文(中)・奈良	116	山工跡	台地地	包含地	中世
76	猪ノ沢遺跡	*	塚	绳文(中)・奈良・平安	117	城内古墳	古地	古墳	古墳(後)
77	猪沢城跡	*	城	中世・近世	118	新井・山根城跡	分层地	城	中世・近世
78	福浦賀原跡	丘陵地	原	绳文(中)・(後)	119	孤塚遺跡	台地	集落跡	弥生・奈良・平安
79	木戸平沢遺跡	台地	包含地	绳文	120	木戸町跡	*	包含地	奈良・平安
80	猪塚遺跡	丘陵地	包含地	绳文(中・後)	121	紫の塚遺跡	冲積地	包含地	绳文(後)・奈良・平安
81	猪形遺跡	*	丘陵	包含地	122	八幡塚跡	冲積地	包含地	绳文
82	正兵台遺跡	台地	包含地	绳文(中・後・後)	123	大畠貴家台跡	台地	贝冢	绳文(中・後)
83	小造塚古墳	丘陵地	古墳	中世(調査)	124	雁山塚跡	丘陵	集落跡	绳文・中世
84	西岸跡	丘陵	城	中世(室町)	125	大立横穴古墳群	丘陵地	横穴古墳	六朝(後)・奈良
85	向山塚跡	丘陵	城	平安	126	禹穴古塚群	丘陵地	横穴古墳	绳文(後)
86	足寄塚跡	丘陵	城	中世	127	敷曉塚跡	丘陵地	贝冢	绳文(後・晚)
87	結塚古墳	*	丘陵	包含地	128	有賀沢遺跡	丘陵地	包含地	绳文(晚)
88	佐野塚跡	*	集落跡	奈良・平安	129	裕山館跡	*	城	新
89	大林塚跡	自然防	台地	平安	130	喜食貝塚	台地	贝冢	绳文(早・中)・(後)

第1表 遺跡地名表



第4図 伊治城跡および周辺の遺跡

## IV 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

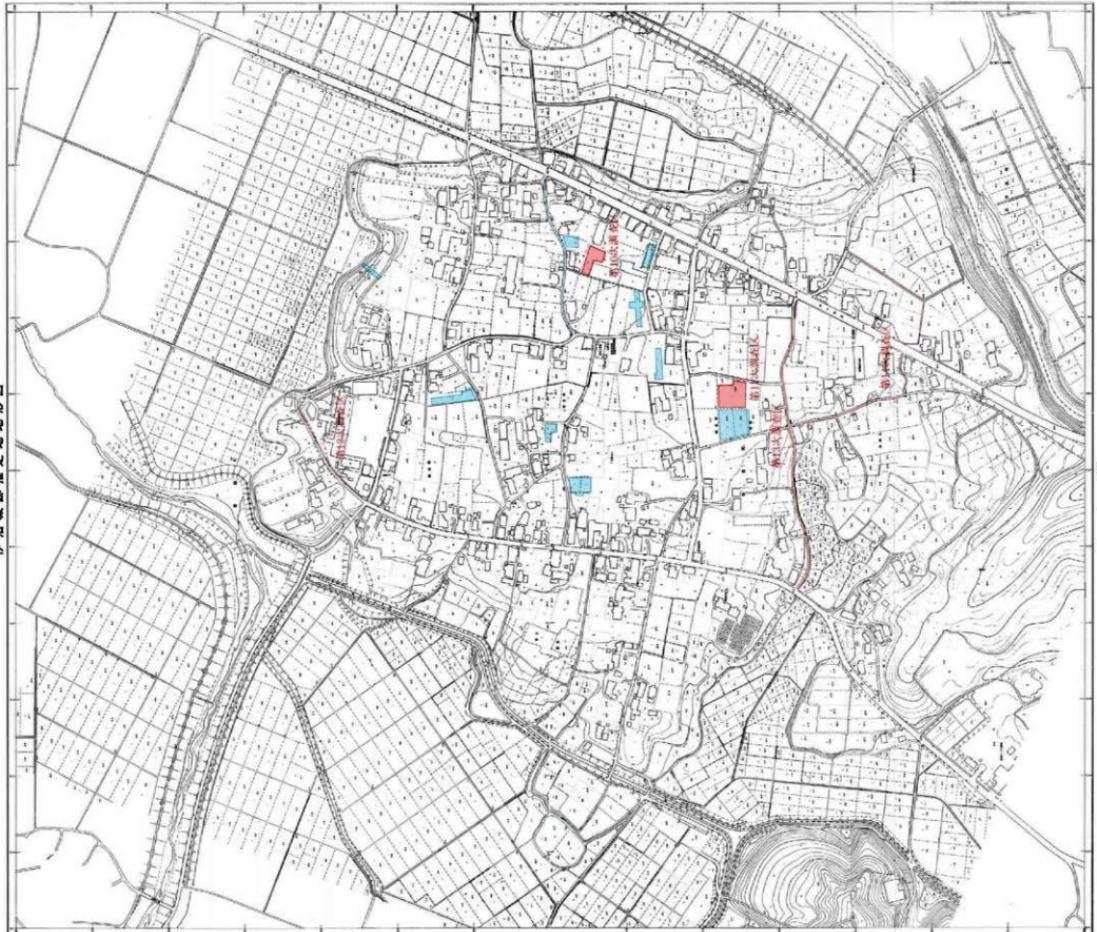
西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍 田中多太麻呂らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五 位上を賜う。	統日本紀
768	2	12. 陸奥や他國の百姓で伊治・桃生に住みたいものの 課役を免ずる。	統日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に坂東8国の百姓を募り安置しようと する。 6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 (「統日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に收める が錯簡とみられここでは神護景雲3年6月9日乙巳 説をとる)	統日本紀
		6. 浮谷の百姓2,500人を伊治城に遷す。	統日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公告麻呂は社庭郡の大領道嶋大權 按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせま り府庫の物をとり放火する。	統日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の炎胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村 の伴にさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史卷 190
796	15	11. 伊治城と玉造塙の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越 後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅をおく。	日本後紀

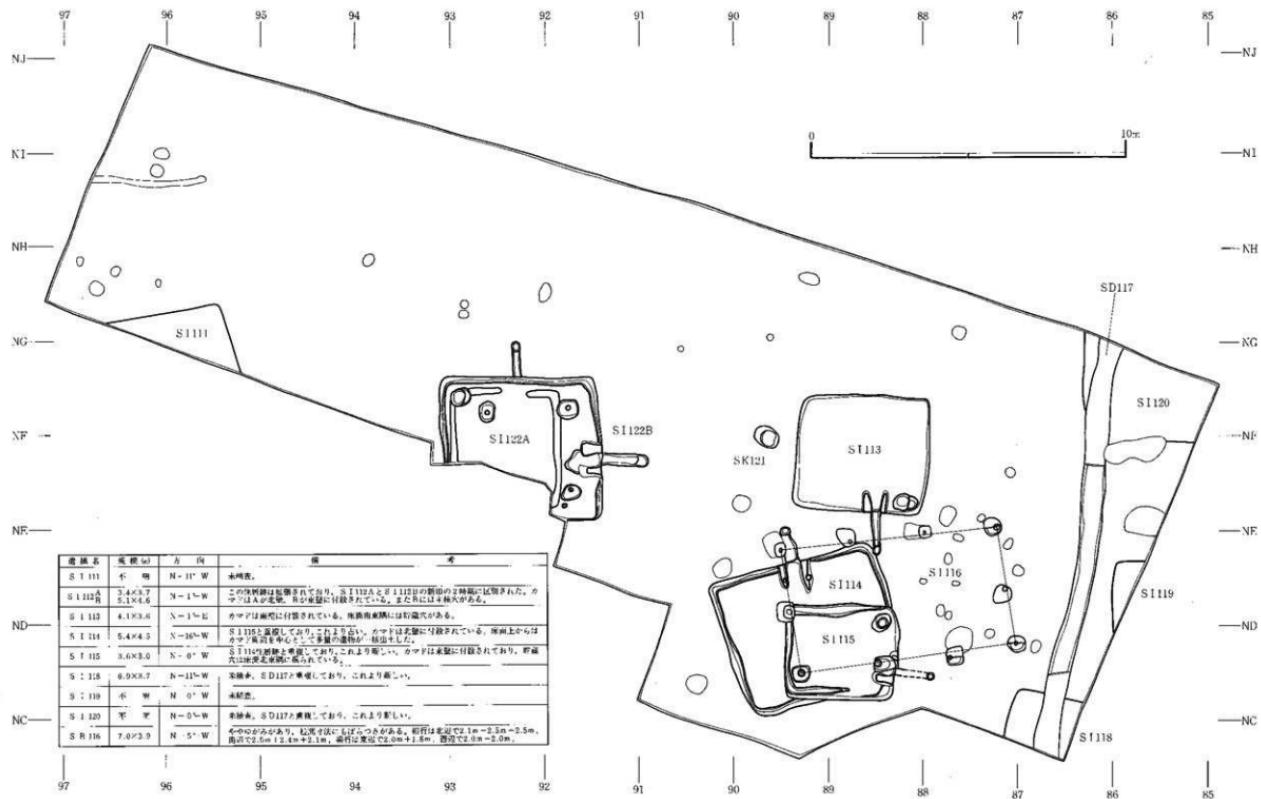
西暦	和暦	記事	文献
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 <small>名大</small> 雄鏡神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 ○民部式 東山道・陝奥國大國 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥國駢馬 ……玉造、栗原、磐井……各5疋	延喜式
931~938	承平年間	和名類聚抄 陸奥國 栗原郡(久利波良) (郷名) 栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康平5	8. 前9年の役で源頼義軍は、栗原郡宮間に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥誌記
1189	文治5	8.7 文治の役で源頼朝の奥羽攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞭榜(仙台市)に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には、若九郎大夫らを大将軍となし数兵の勇士を差しむけた。  8.21 頼朝軍は暴風雨をついて途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾妻鏡
1190	建久1	2.12 頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士、在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。  3.10 栗原寺に逃げのびた兼任が拵夫らに殺害される。吾妻鏡	吾妻鏡

第5回 調査区位置図



伊治製鐵地盤地形図





第6図 第10次調査区道構配図

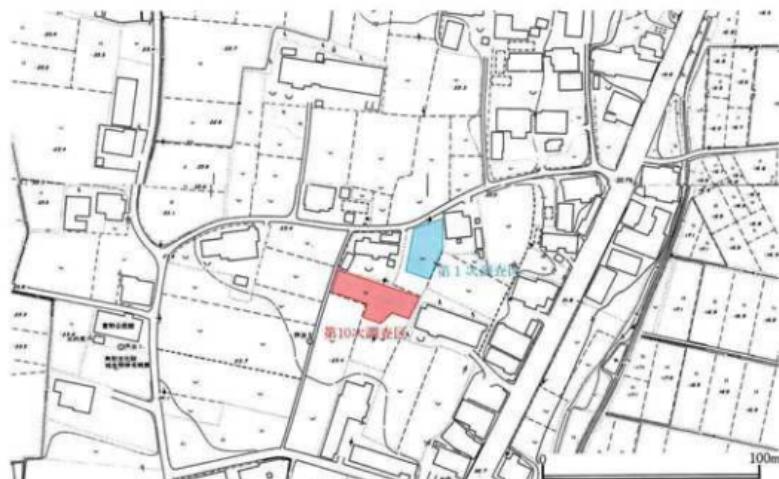
## V 発見された遺構と遺物

### 第10次調査

調査地 城生野唐崎

面 積 480m<sup>2</sup>

期 間 平成元年4月11日～6月1日



第7図 第10次調査区位置図

本調査は、二階堂允康氏の宅地現状変更に伴う事前調査である。

この調査区は、北東側の隣接地が当教育委員会によって既に発掘調査されており、その結果、伊治城跡にかかる5棟の竪穴住居跡が発見されている(築館町教育委員会1988.3)。

このため、現状変更の予定地内には多数の遺構の存在が予想された。そこで調査の方法は対象域の全面を調査する方針をとり、4月11日から作業を開始した。

その結果、調査区内からは竪穴住居跡8棟(S I 111～115, 118～120)のほか、掘立柱建物跡(S B 116)、土器埋設土壙1基(S K 121)、溝1条が検出された。

このうちSB116建物跡は、規模が小さく、重複する3棟の住居跡をすべて切っていること、また群をなす様子がみられないことなどから、伊治城の官衙域を構成するものではないと思われる。

なお、今回は略報に留め、成果の詳細は次回に譲ることにしたい。

## 第11次調査

調査地 城生野唐崎

面 積 780m<sup>2</sup>

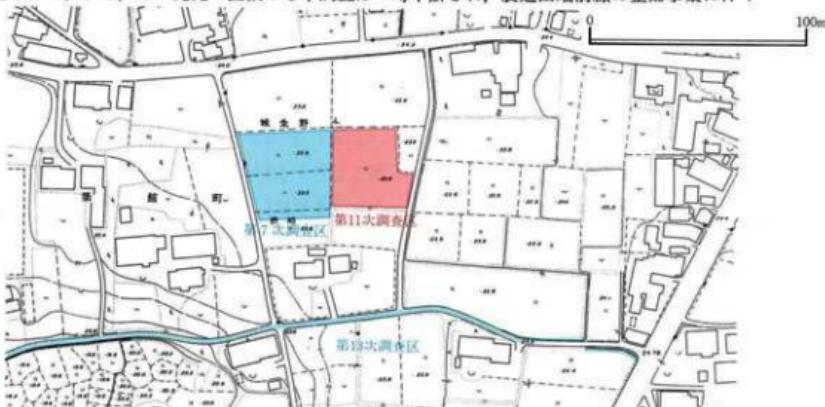
期 間 平成元年7月21日～11月22日

昭和62年度から開始した当教育委員会による発掘調査は、これまで未発見であった政庁跡あるいは官衙ブロックなど城柵の主要な箇所の解明を最大の目的としている。この事業の2年次にあたる昨年度は、城生野地区のやや南寄りに設定した第7次調査で、大規模な2条の区画溝（SD103・SD104）を発見した（築館町教育委員会：1989.3）。なかでもSD103溝は、調査区内で北西のコーナーが検出され、東側と南側へむかって「L」字状に延びている状況が確認されたことから、本年度はこの東側に調査区を設定し、区画溝の内部に配置された造構群の解明に主眼をおいて、7月6日から調査を開始した。

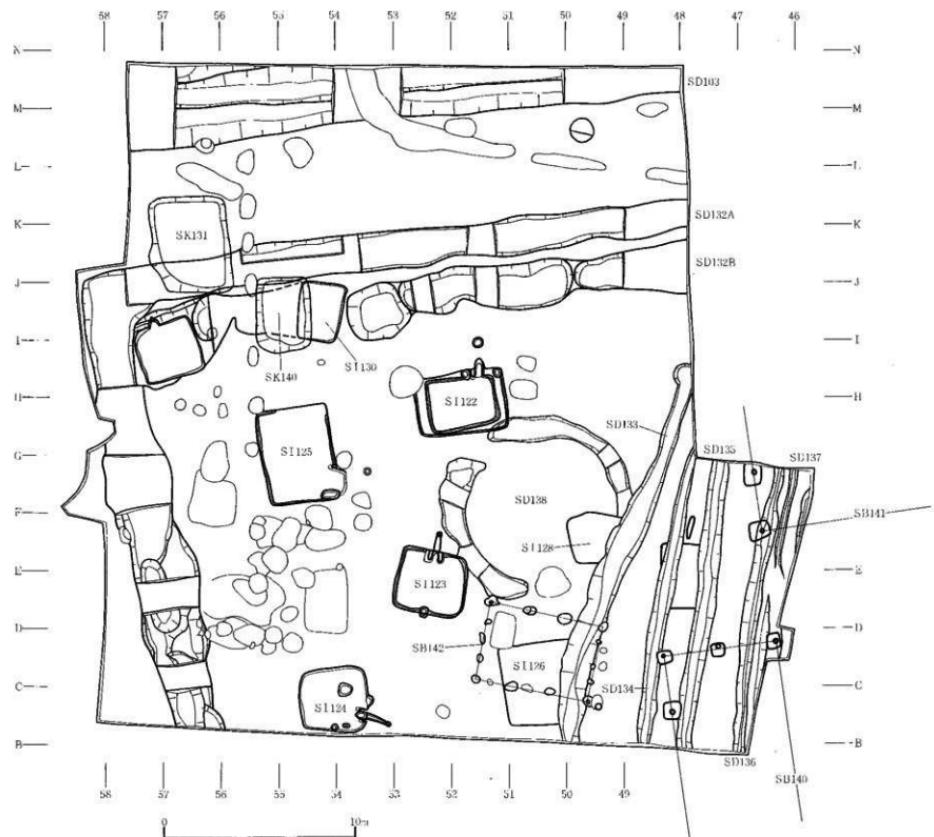
その結果、SD103溝の内側にSD132溝があらたに検出され、まずこの区画施設が二重構造であることが判明した。そしてさらに調査を続けたところ、区画の内側からは9棟の竪穴住居跡が発見され、9月30日に現地説明会を開催して、その成果を一般に公表した。

ところがその後、調査状況には大きな変化がおきた。

まずははじめに、湧水のためこれまで造構確認作業の不十分であった調査区南東隅で、大規模な2棟の建物跡が相次いで発見された（SB140・SB141）。これらは、その一部が確認されたのみではあるが、柱穴の並びから柱筋をそろえた南北棟（SB140）と東西棟（SB141）と推定された。また、この発見の直後から本調査は一時中断され、農道田端前線の整備事業に伴う



第8図 第11次調査区位置図



第9図 第11次調査構造配置図

調査に入ったが、ここでもさるに3棟の建物跡が相次いで発見された(本書)。しかもこのうちの1棟(SB150)は、本調査区で発見されていた2棟の建物跡と柱筋がほぼそろっており、またその他の2棟もほぼ同一の建物方向に設計されているのが確認された。こういった状況から、この一帯は、重の溝で広範囲に区画され、内部に大規模な建物群が計画的に配置された一画であることが、明らかとなった。

この両期的な発見に当教育委員会では、県教育庁文化財保護課との連絡を図って調査体制の充実を行うと共に、11月20日には現地説明会を再度開催して、この成果の公表を行った。また11月26日には、文化庁記念物課河原純之主任技官の現地視察を受け、今後の保護対策の方針について適切な御指導をいただいた。

調査は11月23日までに実測・補足調査を終了し、11月24日には埋め戻しを行って一切の作業を終了した。

以下では、遺構を中心に記述して行く。

## ① 建 物 跡

建物跡は3棟発見された(SB140～142)。このうちSB140建物跡とSB141建物跡は、二重の区画溝(SD103・SD132)の内部に計画的に配置された建物跡である。一方、SB142建物跡は竪穴住居跡(SI126)を切っており、前述の2棟とは建物方向が違う。また、規模の点でも大きく異っており、これらより新しい時期のものと推定される。

### SB140建物跡

梁行2間の南北棟と推定され、調査区の南側へのびている。この建物跡は、東桁行の柱筋を後述するSB141建物跡の西梁行にほぼそろえている。建て替えの痕跡は認められない。

柱穴は0.7m～1.1mの方形をなし、径20cm～34cmの柱痕跡が認められる。柱間寸法は、西桁行が2.86m、北桁行が西から2.82m+3.06m(総長5.88m)を計測する。

断割り調査は、建物北西隅のRで実施した。遺存状況は、確認面から40cmの深さまで残っており、掘り方理土は、地山ブロックを主体とする互層である。

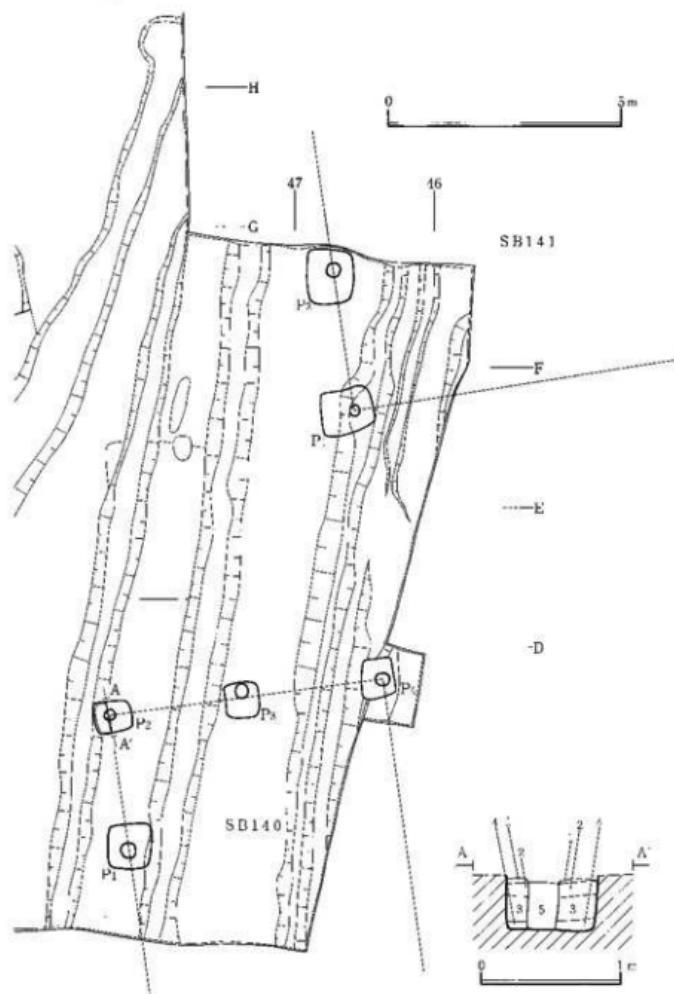
遺物は出土していない。

### SB141建物跡

SB140建物跡東桁行の北延長線上で、2個の柱穴が並んだ状態で検出された(R+R)。この建物跡は、Rの南側と西側へ柱穴がそれ以上伸びないこと、Rの北側にSD103・132区画溝が近接することから、Rを南西隅とする東西棟と推定される。建て替えの痕跡は無い。

なお、この建物跡とSB140建物跡との間隔は2.81mを計測し、おおよそ20尺にとれる。

柱穴は0.9m～1.2mの方形をなし、径24cm～30cmの柱痕跡が認められる。R—E間の柱間寸法は、3.08mを計測する。断割り調査は実施しておらず、出土遺物はない。



層位	層No	土 色	土質	分 布	圖	考
1	1	黑 色(2.5Y N 3)	シルト	しまりがあり、かたい。		
2	2	棕紅 色(10Y R 3/6)	シルト	しまりがあり、かたい。		
3	3	褐 色(10Y R 4)	シルト	しまりがあり、かたい。		
4	4	褐 色(10Y R 4/2)	シルト	しまりがあり、かたい。		
5	5	黑 色(2.5Y N 3)	シルト	けい酸鉄 しまりがなく、やわらかい。		

第10図 SB140・141建物跡

### SB142建物跡

前述した2棟に較べてきわめて小規模な、4間×3間の東西棟である。建物方向は発掘基準に対し、南北方向で東へ大きく振られている。S I 126住居跡、SD 138円形周溝と重複しており、これらより新しい。またSD 133溝とも重複しているが、新旧関係は溝を掘りあげてから確認しているため、判然としない。

柱穴は不整形をなし、不明確なものもあるが抜き穴を伴う。柱の径は、あたり痕から10cm前後と推定される。

この建物跡に伴う遺物は、まったく出土していない。

### ② 住居跡

住居跡は9棟発見された(S I 122~130)。これらは検出状況から区画溝(S D 103・S D 132)の内側で検出された7棟(S I 122~128)と、区画溝(S D 132 B)と重複する2棟(S I 129・S I 130)に大別される。方向は、発掘基準線に対し南北方向で西へやや振れるものが大半である。しかし、S I 123・S I 130住居跡の2棟だけは東へ振れており、他とは区別される。

以下では精査を実施した6棟の住居跡について記述する。

#### S I 122住居跡

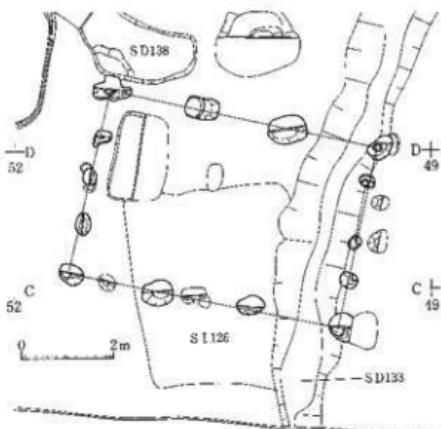
S I 122住居跡は拡張現象が認められ、新旧の2時期に区別された。そこで古い段階の住居跡をS I 122 A、拡張後の新しい段階の住居跡をS I 122 Bとし、両者を区別して説明する。

##### ○ S I 122 A住居跡

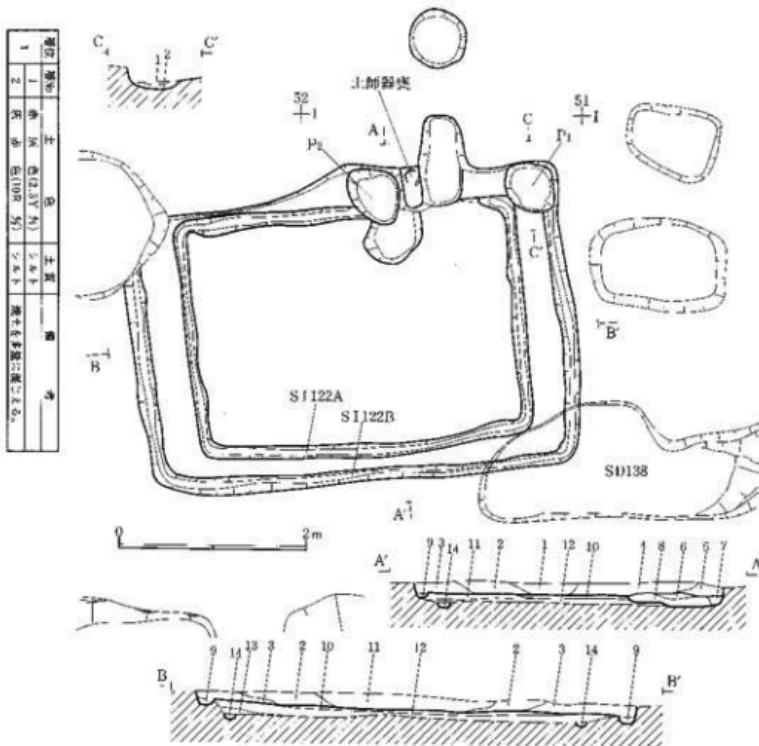
この段階の住居跡は、その後の拡張に伴って床面下まで削平されており、検出されたのは周溝のみである。ただし、北壁ぎわの東寄りの位置で周溝が一部絶切れていることから、ここにカマドが付設されていた可能性がある。平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は東西3.7m、南北2.7mである。住居跡の方向は、発掘基準線に対し南北方向で西へ7°振れている。出土遺物は無い。

##### ○ S I 122 B住居跡

[重複] SD 138円形周溝と重複しており、これより新しい。また、北西隅は煙管の入る口



第II図 SB142建物跡



部位	番号	土色	土質	構造	分布	説明
1	1	にほい黄褐色(10YR 4/6)	シルト			大粒の地山ブロックを不規則に混じえる。
2	2	褐 色(10YR 4/6)	シルト			当面な層。
3	3	褐 色(10YR 4/6)	シルト			均質な層。
4	4	褐 色(10YR 4/6)	シルト			均質な層。
5	5	褐 色(10YR 4/6)	シルト			やわらかくこもりがない。
6	6	にほい黄褐色(10YR 4/6)	シルト			
6	7	褐 色(10YR 4/6)	シルト	S I 122B	壁	地土・地山ブロックを多段に通じえる。
8	8	褐 色(10YR 4/6)	シルト			やわらかく、しまりがない。下部に薄く焼土がかかる。
7	9	褐 色(10YR 4/6)	シルト			
8	10	にほい黄褐色(10YR 4/6)	シルト			地山ブロックをまだらに通じえる。しまりがある。
	11	黒 色(10YR 4/6)	シルト			粗大物なし。しまりがある。
	12	褐 色(10YR 4/6)	シルト			地山大粒を少頭配じえる。
	13	褐 色(10YR 4/6)	シルト			
	14	にほい黄褐色(10YR 4/6)	シルト	S I 122A	周 溝 内	

第12図 S I 122 住居跡

形の土壤に破壊されている。

〔平面形・規模〕 拡張は東西方向にひろく行われており、拡張後の規模は東西4.7m、南北2.9mである。平面形は、東西に細長い長方形をなすが、北辺はゆがみが大きい。

〔堆積土〕 埋穴内の堆積土は、5層に区別された。第1層はにぶい黄褐色のシルトで、大粒の地山ブロックを不規則に混じえている。これより下の層は混入物をほとんど含まない均質なシルトで、やわらかくしまりがない。色調は下層になるほど暗くなっている、暗褐色から黒褐色に変化する。

〔壁〕 雄認面から10cm前後の高さまで残存している。直立気味に立ち上がる。

〔床〕 床は、住居掘り方へ地山ブロックの多量に混じる4枚のシルト層を埋めることによってつくり出している。北半部の上面はしまっており、硬い。

〔カマド〕 S I 122 Aの推定位置と同じ北壁の東寄りに付設されている。遺存状況は悪く、煙道は煙出しのビットに接続する付近が削平されてしまっている。また、燃焼部の東側壁も残存していない。残存していた西側壁は、土師器甕1個体を芯に用い、その周囲に黒褐色の粘土を貼ることによって構築している。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 北壁を除く各辺の壁沿いを巡っている。規模は幅7cm~8cm、深さ10cm~13cmである。断面形はじ字形をなす。堆積土は黒褐色のシルトで、埋穴内の堆積土とは区別される。

〔ビット〕 貯蔵穴の可能性のあるビットが2基検出された(B・B)。堆積土中には焼土が充満している。

〔出土遺物〕 床面から土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕が出土した。このうち須恵器坏は、ヘラ切り無調整の完形品を含んでいる。土師器の坏はロクロが使用された表形ノ入式のもので、甕はロクロ使用・不使用のものが混在している。

### S I 123住居跡

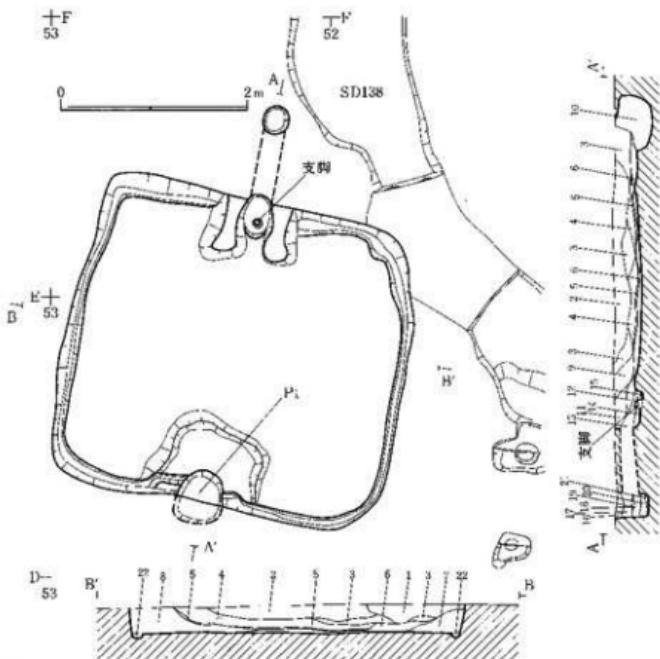
〔重複〕 S D 138円形周溝と重複しており、これより新しい。

〔平面形・規模〕 東西3.6m、南北3.3mの方形をなす。北東隅はいくぶん丸味をもつている。

〔方向〕 発掘基準線に対し、南北方向で東へ11°振れている。

〔堆積土〕 埋穴内の堆積土は、5層に大別された。第1層と第2層は住居跡中央にレンズ状に堆積するシルトで、やわらかくしまりがない。第3層は、幸と思われる炭化した植物遺体を多量に混じえており、埋穴内の全域を2cm~5cmの厚さで覆っている。第2層との層理面からは、完形品を含む多量の遺物が一括して出土した。第4層は第3層の形成以前に床面上に堆積した層で、4cm~8cmの厚さがある。また、第5層は第3層の形成以前に壁ぎわに堆積した

層である。ところで、第3層は床面を直接覆うものではなく、また、この層の形成される以前に、壁ぎわでは既に上層の堆積がかなり進行している。しかも炭化した植物遺体には、上部構



層位	層名	土色	土質	分類	備考	等
1	2	黒褐色(10YR 3/0)	シルト		均質。	
	3	褐黃褐色(10YR 4/6)	シルト		均質でしまりがない。	
2	4	褐 色(10Y R 5/6)	シルト		地山ブリックを荷降り状に覆じえる。	
3	5	褐 色(10Y R 6/6)	シルト	壁穴内	注記全面に分布している。焼形をとどめた炭化物がみられる。上面から一軒遺物 画面下を横に覆っている。	
4	6	褐 色(7.5YR 6/6)	シルト		均質。	
	7	黒 色(10Y R 5/6)	シルト		人為埋積土？ 地山ブリックを荷降り状に覆じえる。	
5	8	にかい黄褐色(10Y R 6/6)	シルト		地山ブリックを中量混じる。ややかたい。	
	9	褐 色(10Y R 6/6)	シルト			
6	10	褐 色(10Y R 6/6)	シルト	R	やわらかく。ボソボソしている。	
	11	赤 色(2.5YR 5/6)	シルト			
	12	灰 色(5YR 5/6)	シルト			
	13	灰 色(5YR 5/6)	シルト	キマツ	ややしまりがある。	
7	14	褐 色(10R 5/6)	シルト	機械面	機械層。	
	15	暗水灰 色(10R 5/6)	シルト		機土被が多量に混じる。	
	16	赤 色(2.5YR 5/6)	シルト			
	17	にかい赤褐色(5YR 5/6)	シルト			
	18	黒 色(5YR 5/6)	シルト	キマツ	底層。	
8	19	暗水灰 色(7.5R 5/6)	シルト	sondage		
	20	赤 色(10R 5/6)	シルト	ビット		
	21	赤 色(10R 5/6)	シルト		機土を多量に混じる。	
9	22	灰 色(10Y R 6/6)	シルト	調査内	ややかたい。	

第13図 SII 123 住居跡

造を支えるための木材とみられるものはまったく検出されなかった。

こういったことから第3層の性格は、凹みとなった廃絶後の住居跡へ遺物を一括投棄し、そこへ火を放った結果生じたものとみなされる。したがって、本住居跡の廃絶の原因は、これまでに検出された火災住居跡（宮城県多賀城跡調査研究所：1978.3、築館町教育委員会：1988.3）とは区別して考えられる。

〔壁〕 遺存状況は良好で、しっかりとしている。直立気味に立ち上がっており、25cm～35cmの壁高がある。

〔床〕 平坦で凹凸が無い。南西部では周辺よりややレベルが下がっている。

〔カマド〕 北壁の中央部に付設されている。遺存状況はきわめて良好で、煙道は天井部が崩落せずに残っていた。燃焼部は白色粘土で構築されており、幅40cm、奥行70cmの規模がある。底面は浅く皿状に凹み、中央には倒立した土師器壺の体部下半が支脚として据えつけられていた。煙道部との境は、住居壁の延長線上に一致する落差約15cmの段で区画されている。

一方、煙道部はこの段から住居外へ66cmのびる煙道とその先端に掘られた径30cmの煙出しのピットからなる。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 カマドとRを除く各辺の住居壁沿いを巡り、全周する。規模は幅10cm～20cm、深さ5cm～8cmである。堆積土は灰黄褐色のかたいシルトで、竪穴内のものとは区別される。

〔ピット〕 カマドの対称位置となる南壁中央部で、1基検出された(R)。このピットの南北半分は、住居壁を外側へ掘り込んでいる。規模は南北58cm、東西45cmで、平面形は梢円形をなす。堆積土はやわらかく、炭化物をわずかに混じえている。また北半では、このピットの周囲を巡る黄褐色の粘土帯が検出されており、このピットに関連する施設と思われる。

〔出土遺物〕 第3層上面を中心に質量ともにかなり豊富な遺物が出土した。目立ったものとしては、脚部に方形の透しをもつ円面鏡、ヘラ切り無調整の須恵器壺・蓋などがある。またRの堆積土中からも、ほぼ完形品のヘラ切り無調整の壺が1点出土した。

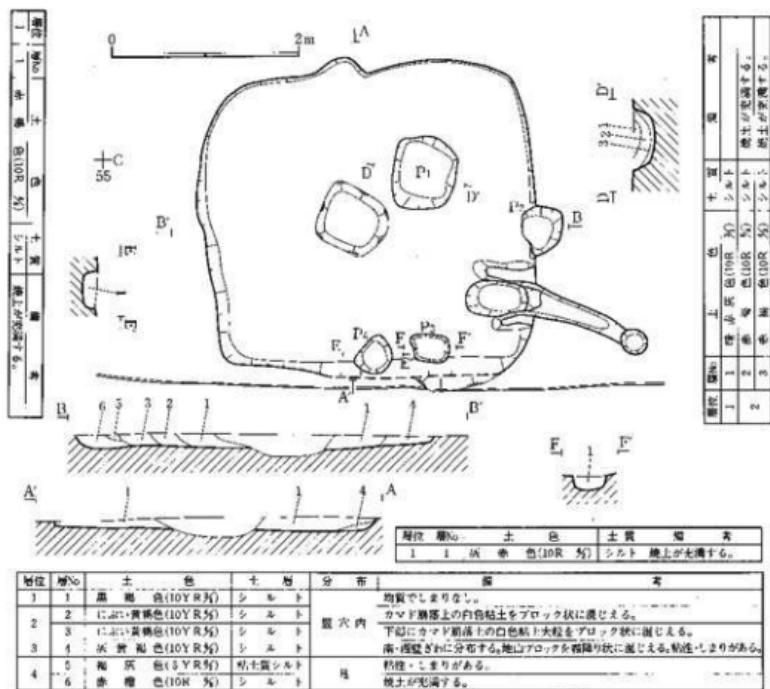
### SII24住居跡

〔重複〕 遺構との重複はないが、このあたり一帯はカクランが著しい。このためプランは地山面をかなり削り込んで確認した。

〔平面形・規模〕 東西3.6m、南北3.2mの東西にやや長い方形をなす。

〔方向〕 発掘基準線に対し、南北方向で西へ3°傾れている。

〔堆積土〕 竪穴内の堆積土は3層に大別された。第1層は住居跡中央にレンズ状に堆積しており、やわらかくしまりがない。第2層はカマド周辺に堆積しており、白色粘土のブロックを混じえている。第3層は南壁と西壁ぎわに堆積し、地山ブロックを霜降り状に混じえている。



第14図 S I 124 住居跡

〔壁〕 遺存状況はきわめて悪い。立ち上がりはゆるやかで、確認面から4cm～8cmあまりの高さがある。

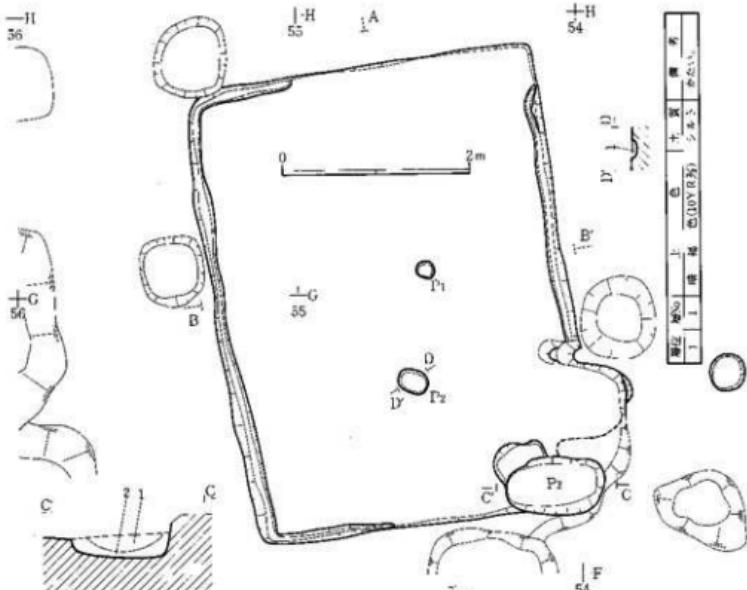
〔床〕 凹凸がある。上面には、カマド付近から中央部にかけて焼土と炭の細粒が分布しており、汚れている。

〔カマド〕 東壁の南隅近くに付設されている。遺存状況は悪い。焼燃部は白色粘土で構築されており、規模は幅40cm、奥行50cmである。煙道部との境界は、住居壁の延長線上に一致する落差およそ7cmの段で区画されている。底面は浅く皿状に凹んでおり、焼土の堆積がみられた。一方、煙道部は住居の東西方向に対し、大きく南に振れている。

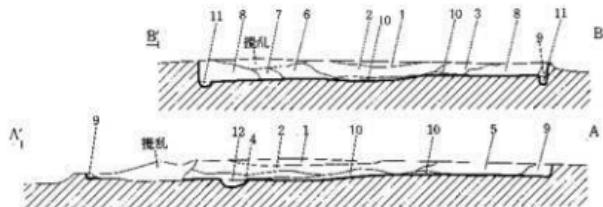
〔柱穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 検出されなかった。

〔ピット〕 焼土の充満する計4基のピットが検出された(R～R)。これらは床面上にある大形とRと、壁ぎわにある小型のR～Rに区別される。



層位	番号	上色	土質	箇所	色
1	1	灰 色(2.5Y R 5/6)	シルト	地 面	粘土・白い粘土ブロックが充満する。
	2	赤 色(10R 8/6)	シルト		機 土が充満する。



層位	番号	土色	土質	箇所	箇所
1	1	褐 色(10Y R 5/6)	シルト	基 盤	ややしきりがある。物理。
	2	褐 色(10Y R 5/6)	シルト		地 面に較べてやや砂質。
	3	褐 色(10Y R 5/6)	シルト		地山ブロックをまだらに感じている。きたない。
	4	黑 色(10Y R 5/6)	シルト		均質、南北を中心と増強している。
2	5	モリーブ褐色(5 YN 5/6)	シルト	基 盤内	細かな地山粒をまだらに感じえる。きたない。
	6	褐 色(10Y R 5/6)	シルト		地山ブロックを感じている。
	7	褐 色(10Y R 5/6)	シルト		地山ブロックを地質に感じている。
3	8	にぼい黄褐色(7.5Y R 5/6)	シルト	地 面	均質。
	9	にぼい黄褐色(7.5Y R 5/6)	シルト		基盤より黒色(5 YP 5/6)。
	10	黑 色(10Y R 5/6)	シルト		特徴がある。表面を薄く覆っている。
4	11	褐 色(10Y R 5/6)	シルト	地 面	やや砂質。
	12	褐 色(10Y R 5/6)	シルト	月	やや粘性。ささがある。

第15図 S I 125 住居跡

〔出土遺物〕 カマド周辺の床面上から、土師器壺・甕、須恵器壺・高台付壺・蓋・甕が出土した。須恵器壺はいずれもヘラ切り無調整のもので、「上」の墨書きのみられるものが1点ある。また、土師器はロクロ使用・不使用のものが混在している。

#### SII125住居跡

〔重複〕 連構との重複は無いが、南東部ではカクランによる破壊が著しい。

〔平面形・規模〕 南北に細長い整った長方形をなす。南北5.0m、南西3.8mを計測する。

〔方向〕 発掘基準線に対し、南北方向で西へ8°振れている。

〔堆積I.〕 突穴内の堆積土は、4層に大別された。第1層と第2層は、住居跡中央にレンズ状に堆積するもので、色調は暗褐色を主体とする。第3層は壁ぎわに堆積しており、にぶい黄褐色を呈している。第4層は粘性のある黒褐色のシルトで、床面上を直接覆っている。

〔壁〕 直立気味に立ち上がっており、10cm~18cmの高さまで残存している。

〔床〕 平坦で凹凸がない。

〔カマド〕 東壁の南隅近くに付設されている。カクランのため遺存状況は悪い。煙道部は煙出しのピット以外は残っておらず、また、燃焼部の南側壁も破壊されていた。しかし、南側壁の想定される位置は床面の汚れがなくプライマリーな地山面が露出している(第15図破線)。ここで計測すると燃焼部の規模は、幅80cm、奥行84cmである。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 カマドを除く各辺の壁沿いを巡るが、北辺と南辺の一部では一部絶切れている。規模は幅16cm~20cm、深さ3cm~5cmである。断面形はU字形をなす。堆積土はやや砂質の褐色のシルトであり、突穴内の堆積土とは区別される。

〔ピット〕 計3基検出された(R~B)。このうちBは貯蔵穴と考えられる。

〔出土遺物〕 出土遺物は少量で、カマド周辺の床面上とカマド燃焼部の天井部崩落土上面から土師器甕が出土した。これらは、ロクロ使用・不使用のものが混在している。

#### SII129住居跡

〔重複・確認状況〕 この住居跡は、SD132B溝にプランが完全に重複しており、しかも同溝とは一連の堆積過程で土砂が自然流入している。このため、地山面での確認作業の段階では、プランを識別することはできなかった。本住居跡のプラン確認は、あたりの精査が進み、この住居跡の上場まで堆積土がとり除かれた段階である。

〔平面形・規模〕 東西3.2m、南北3.0mの方形をなす。

〔方向〕 発掘基準線に対し、南北方向で西へ18°振れている。

〔堆積土〕 第1層は灰黄褐色のシルトで、レンズ状に堆積しており、地山ブロックを多量に混じえている。第2層は壁ぎわに堆積する黒褐色のシルトである。ところで本住居跡は、前

述したようにSD 132B溝と一連の堆積過程で埋まっていることから、年代的にはさわめて近い関係にあると思われる。一方、これより古いSD 103A溝とは壁が接するほど近接していることから、この溝が機能していた段階から営まれていたとは思われない。したがって、この住居跡はSD 103溝がつくり替えられた時に短期間営まれ、土取りがこの場所に及んだ時点には既に廃棄されていたと推定される。

【壁】 立ち上がりは丸味をおびているが、しっかりとしている。壁高は、最も保存の良い南壁で30cm前後ある。

【床】 比較的平坦で凹凸がない。全体に北側へむかってゆるやかに傾斜している。

【カマド】 北壁中央のいくぶん西寄りの位置で、小型のカマドが検出された。燃焼部は、構築に際し住居壁を外側へ掘り込んでおり、幅56cm、奥行48cmの丸味をおびた方形をなす。壁面は焼けている。一方、煙道部は長さ36cmの短いもので、煙出しのピットをもっていない。

【柱穴】 検出されなかった。



層位	層No	土 色	上質	分 布	考
1	1	灰 黄褐色(10YR5)	シルト	壁 内	地山ブロックを多量に混じる。
2	2	灰 黄褐色(10YR5)	シルト	壁 内	地質で盛人物を混じえない。
3	3	灰 黄褐色(10YR5)	シルト		地山ブロックを不規則に混じる。

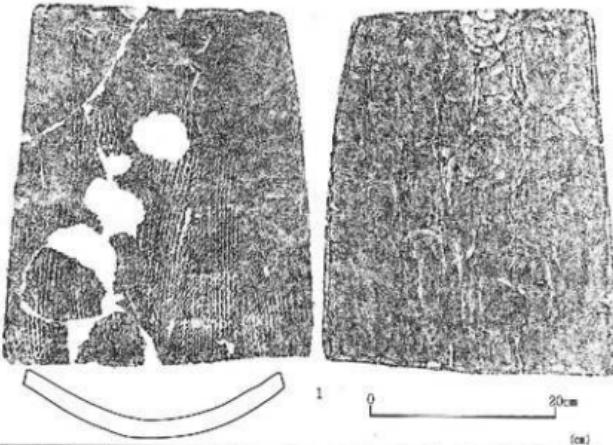
第16図 S I 129 住居跡

〔周溝〕 検出

されなかった。

〔出土遺物〕

カマド西側の住居  
壁にたてかけられ  
た状態で完形品の  
平瓦が1点出土し  
た(第17図)。凸面  
には繩叩き目が残  
り、一枚造りとみ  
られる。



その他の出土遺物は無い。

第17図 SI129住居跡出土遺物

### SI130住居跡

〔重複〕 現状ではSD132溝との切り合いはないが、後述するように、本来両造構は重複していたと思われる。また、SK140土壤と重複しており、これより古い。

〔平面形・規模〕 南北に細長い長方形をなし、ややゆがみがある。南北3.1m、東西2.3m。

〔方向〕 発掘基準線に対し、南北方向で東へ12°傾斜している。

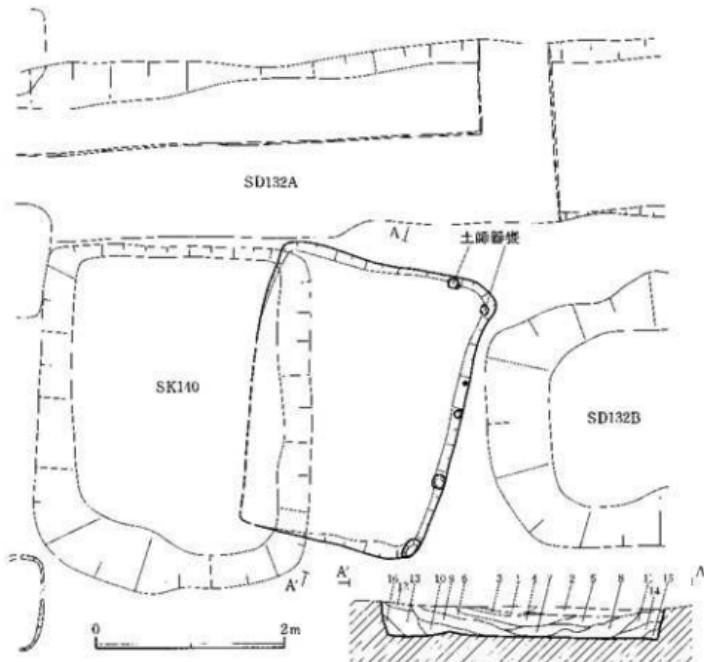
〔堆積土〕 堆積土は4層に大別された。このうち第1~3層は、住居跡中央にレンズ状に堆積するもので、全体に混入物をあまり含まず均質でやわらかい。色調は灰黄褐色ないしにぶい褐色を主体とし、比較的明るい。一方、第4層は疊ぎわに堆積するもので、地山ブロックを主体とする混入物を多量に含んでいる。また色調も、第1~3層に較べて暗いものが多い。

なお本住居跡の堆積土をSD132B溝の堆積土と比較したところ、両造構は一連に埋まったものであった。このことから本来、同溝とは上部で重複していた可能性が高いと思われる。したがって、前述したSI129住居跡と同様に、この住居跡は区画溝のつくり替えに伴って営まれたものと推定される。

〔壁〕 直立気味に立ち上がっている。確認面から30cm~40cmの高さまで残っている。

〔床〕 地山面を直接床面とし、貼床は施されていない。

〔カマド〕 住居北東隅でカマドと思われる箇所が検出された。ここはプランがいくぶん外側に突出しており、壁は焼けている。またこの両側には、倒立した土師器甕が1個体づつ据えられており、側壁の芯として用いられたものと考えられる。しかし、住居壁の残りが良好なのに



層位	層No	上	色	土質分布	圖	
					外	内
1	1	にぶい	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	断かな地山柱を多量に含む。	
	2	褐	褐色(7.5YR 4/6)	シルト	均質で粘土物を含まない。	
	3	黒	色(10YR 4/2)		均質で粘土物を含まない。	
	4	灰	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	地山ブロックを不規則に混じる。	
	5	灰	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	地山ブロックを微量に混じる。	
	6	灰	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	全般に均質でやわらかい。	
	7	にぶい	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	地山ブロックをやや多く含む。	
3	8	に	にぶい	褐色(10YR 5/6)	上部は地山ブロックをやや混じる。	
	9	に	にぶい	褐色(10YR 5/6)	地山ブロックを複数枚状に含む。	
	10	灰	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	かたい。	
	11	褐	褐色(10YR 5/6)	シルト	地山ブロックを複数枚状に含む。	
	12	灰	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	大量的地山柱をさばらに含む。	壁ぎわに堆積している。
	13	暗	褐色(10YR 5/6)	シルト		
	14	暗	褐色(10YR 5/6)	シルト	地山の苔土。	
	15	暗	褐色(10YR 5/6)	シルト	地山ブロックを複数枚状に含む。	
4	16	黒	褐色(10YR 5/6)	シルト		

第18図 SII 130 住居跡

もかかわらず、住居外へのびる縁道は検出されなかった。このことから、本道路に一般的なカマドとは、基本的に構造の異なるものと推定される。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔壁柱穴〕 東壁で壁柱穴かと思われるピットが4個検出された。しかし、他の壁ではまったく確認されていないことから、やや疑問が残る。

〔廻溝〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 カマドの施設として2個体、床面上から1個体の土師器甕が出土した。いずれもロクロ不使用で口縁部下端には段が認められる。

### ③ 溝

調査区内からは、6条の溝が発見された（SD 103・132・134～137）。このうちSD 103・SD 132溝は、城柵内を区画する二重の区画施設である。この区画の内側には、前述したように大規模な建物群が計画的に配置されている。一方、SD 134～137溝は、具体的な時期を決定することはできないが、他との重複関係から伊治城跡よりはかなり年代の下る遺構と考えられる。

#### SD103・SD132溝

この2条の溝は、北西のコーナーが検出され、城柵内を並行して走る区画施設であることが判明した。ともに2時期の変遷があり、両者は一体となって機能していたと思われる。方向は北辺に対し、西辺がかなり内側に振れて掘られている。

ところで、この区画施設には、2条の溝の間に盛土による構造物が存在した可能性がある。しかし、掘込み事業や寄柱などそれを裏付ける痕跡はまったく検出されず、また堆積土の状況も盛土の崩壊を示すような様相はみられなかった。したがって、現状としてはこの区画の構造を「二重の溝で構成されたもの」と理解しておきたい。

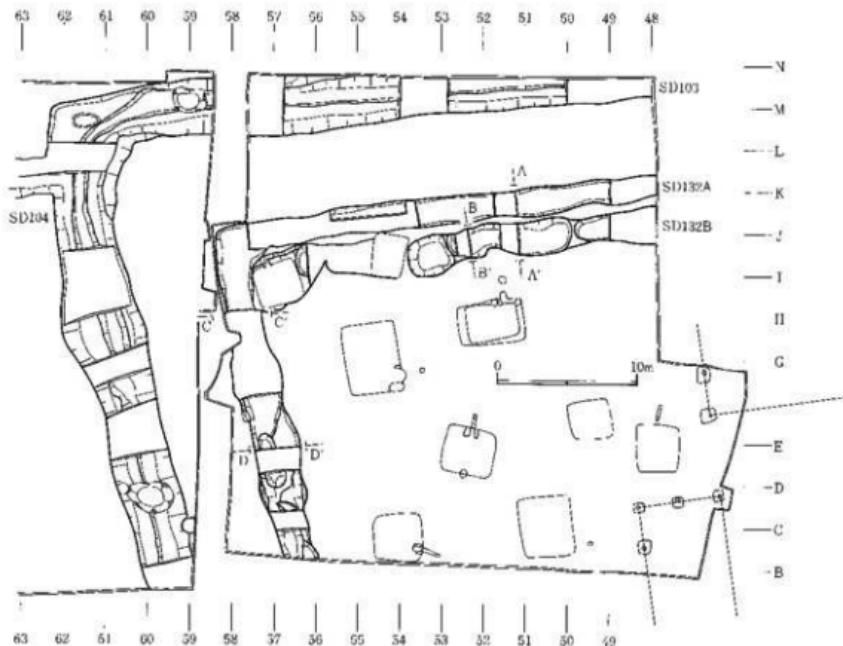
##### ○ SD 103 溝

昨年度の第7次調査で北西のコーナーが検出されており、本調査で北辺への延長が41mまで確認された。2時期の変遷があり（SD 103A・B）、新しい段階の溝の堆積土中には灰白色火山灰（山田・庄子：1980.3）が厚く堆積している。また、この溝の古い段階には、北西のコーナーからやや南寄りの位置に、区間外へ延びるSD 104溝が接続していたことが判明している（築館町教育委員会：1988.3）。改修は前段階の溝の内側に若干重複して行われている。その結果、断面が皿状をなす溝が、逆台形をなす上幅3.0m～4.0mの溝へ変化している。

出土遺物は大半がSD 103 B溝の灰白色火山灰下層から出土した。主体を占めるのはヘラ切り無調整の須恵器坏で、この他、須恵器蓋・甕、土師器甕が出土している。

##### ○ SD 132 溝

SD 103溝の内側を並行して走っており、2時期の変遷が認められる（SD 132 A・B）。規模は外側のSD 103溝に較べて狭く、上幅は1.7m～2.0mである。また底面も浅い。このためSD 132 B溝では、灰白色火山灰は造構確認段階で部分的に認められる程度であった。改修は前段階の溝の内側で行われており、西辺が若干重複して、北辺がわずかに隙間をおいて実施されている。この結果、底面が平坦で壁の直立して立ち上がる整った溝が、凹凸が激しく土壤の連続した状況を呈する溝へ変化している。

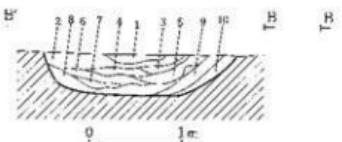


層位	層番	土 色	土 質	通 標	備考
1	1	黒褐色(5YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。
	2	黒褐色(5YR 4/0)	シルト		やわらかい。
	3	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。機械、鉄をわずかに滑こらす。
	4	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。機械、鉄をわずかに滑こえる。
	5	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。
2	6	褐色(10YR 4/0)	シルト		細かな砂粒を含む状に感じえる。
	7	褐色(10YR 4/0)	シルト		下部に大粒の地山ブロックを若干混じる。
	8	褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。
	9	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。層No. 8と基本的に同じ層とみられる。
3	10	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		壁の芯土とみられる。地山。
	11	にじみ黄褐色(10YR 4/0)	シルト		

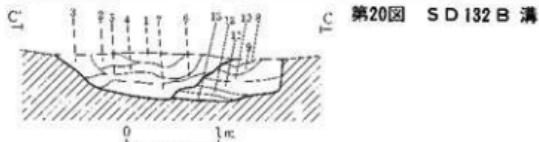
層位	層番	土 色	土 質	通 標	備考
2	1	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		細かな地山を含む感じで感じられる。
	2	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。
	3	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		やわらかく、しまりがない。
	4	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		砂質地を若干含む。
	5	黒褐色(10YR 4/0)	シルト		層No. 4より黒色味が強い。
	6	黒褐色(2.5V 4/0)	シルト		層No. 5とおもし、壁・鉄面を覆う。
3	SD132A				

第19図 SD132 (A-B) 溝

・高台付环・甌、平瓦・丸瓦である。



層位	層 No.	土 色	土 質	備 考
1	1	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	地山ブロック・黑色土を多量に混じえる。かたさ。
	2	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	塊状物がなく、やわらかい。しまりなし。
	3	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	地山ブロックをわずかに混じえる。
2	4	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	地質でしまりなし。
	5	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	やや固めでしまりなし。
3	6	こぶし黄褐色(10YR 4/6)	シルト	やや固めでしまりなし。
	7	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	
4	8	暗 黄 色(10YR 4/6)	シルト	地質でしまりなし。
	9	オーラープ蘭(2,5Y 5/6)	シルト	細かな地山ブロックを多量に混じえる。
5	10	オーラープ蘭(2,5Y 5/6)	シルト	細かな地山ブロックを多量に混じえる。



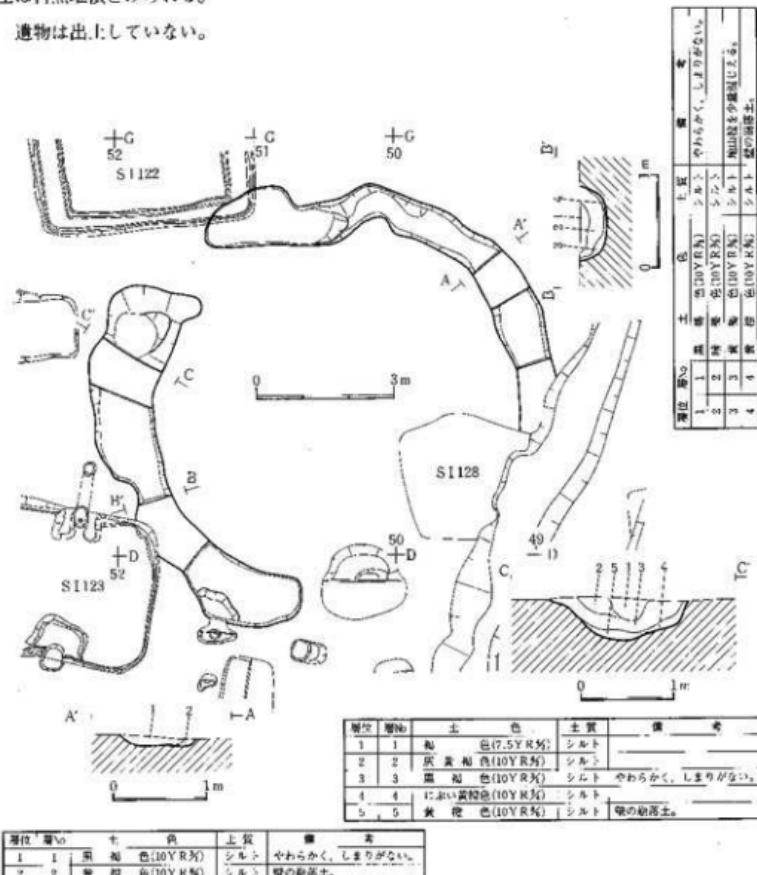
#### ④ 円形周溝

円形周溝は1基発見された (SD 138円形周溝)。

##### SD138円形周溝

この遺構は、S I 122A・123・128住居跡、S B 142建物跡、S D 133溝と重複しており、このなかで最も古い。径は溝の外側で計測すると 9.6 m である。周溝は北西と南東の一部で絶切れている。内部からは主体部とみられる施設は検出されなかった。底面は凹凸が激しく、堆積土は自然堆積とみられる。

遺物は出土していない。



第23図 SD138円形周溝

## 第12次調査

調査地 城生町大堀

面積 1,700m<sup>2</sup>

期間 平成元年9月5日～9月16日



第24図 第12次調査区位置図

伊治城跡内にある富野小学校は老朽化が進み、校舎の新築がかなてから要望されてきた。このため、現在の小学校を遺跡外の水田へ移転することが決定したが、今回これにともなって、城生野根岸線が通学路として拡幅・舗装されることになった。

ところで、富野小学校の東側では伊治城の北辺外郭線を構成する土塁と大溝が、現在でも地表面から観察される。このため富野小学校をはさんでその西側にあたるこの路線敷には、外郭線の延長が埋もれていることが十分予想された。そこでこのことを念頭において、9月8日から造構確認作業を開始した。

その結果、地形の状況から外郭線の位置が想定されていた調査区のなかほどで、予想どおりそれとみられる幅10m以上の大溝が検出された。ところが、このあたり一帯は地形的に周囲より低いことから湧水が激しく、人力による精査には危険が伴った。そこで精査にはバックホーを用いて2.5mほどまで掘り下げ、10世紀前半に降下した灰白色火山灰（庄子・山田：1980.3）の堆積を確認したが、壁の崩落が激しく、この段階で作業は中止した。

一方、土塁は後世の削平のため、まったく残存していなかった。しかし、この大溝の北辺か

ら12mほど外側へ離れた地点で、これに並行して走る幅2.0m、深さ1.3mの溝が検出された。この溝は堆積土中に灰白色火山灰（庄子・山田：1980.3）が厚くみられ、また須恵器片が少量出土したことから、区画施設の一部をなすものと考えられる。したがって、この付近では土塁とこれに並行して走る二重の溝で、外郭線が構成されていたと推定される。

なお、これは別に調査区の北半では、古墳時代前期の溝が発見された。この溝は南西 東西方向に走っており、断面はV字形をなしている。規模は上幅1.0m～1.2m、深さ0.8m～1.1m程度であるが、後世の削平を受けていることを考えると、当時はきわめて大規模なものであったと推定される。

出土した遺物は、すべて埴輪式の土師器である。これらは底面で潰れた状態で出土したもののが大半で、ほぼ同一時期の所産とみなされる。器種には、壇・高壇・器台・甕・蓋等があり、すべて日常雑器で構成される。遺存状況は良好で、当該期の好資料になると思われる。

なお、この溝の性格は、集落もしくは豪族層の居宅を巡る環濠の可能性を考えられる。

# 田端前線発掘調査

## 第13次調査

調査地 城生野唐崎

面 積 1,960m<sup>2</sup>

期 間 平成元年10月16日～11月10日

伊治城跡の所在

する城生野地区では、昭和62年度に実施された儀平線以来、農道整備事業が継続されている。本年度は、照明寺から国道4号線にむかって東西に走る総延長392mの田端前線が対象となった。このため当教育委員会では、年度当初より事業担当者である町農地整備課との協議を再三行い、



第25図 第13次調査区位置図

調査の方法や実施期間あるいは予算の問題などについて、調整を図ってきた。その結果、費用は農地整備課の負担とし、路線敷全面を対象に10月中旬から調査を実施することで合意した。そこで国庫補助事業にもとづいて実施していた第11次調査区を一時中断し、10月16日より作業を開始した。

調査は路線敷の西半部から開始したが、この一帯は西側から入り込む沢状の地形を横断している。このため表土下には、グライ化した緑灰色の砂層が厚く堆積しており、時期不明の井戸以外には遺構はまったく検出されなかった。ただし、遺構外からの遺物の量は割合が多く、須恵器壺を中心として200点に近い土器が出土した。これらのなかには墨書きのあるものもあり判読が可能なものには、「栗口」・「厨」・「子」・「上」・「①」がある。

一方、調査区東半部は台地平坦面に位置することから、古代の遺構の存在が当初から予想されたが、まず第7・11次調査の南側でSD103・132区画溝の西辺の延長が検出された。この地



第26図 第13次調査東区造構配置図

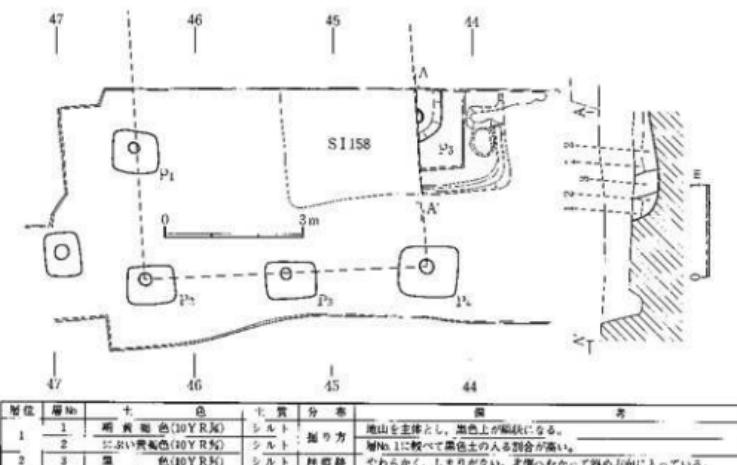
点は北西のコーナーから計測すると、外側の S D103溝で82m、内側の S D132溝で71mの位置にあたる。そしてさらに路線敷の東側へ調査を続けたところ、相次いで3棟の建物跡（SB150～152）が発見された。このうち S B150建物跡は、第11次調査区で検出されていた2棟の建物跡（S B140・141）と柱筋がほぼそろっており、またその他の建物跡も、ほぼ同一の建物方向をとっていることが確認された。こういった状況から、大規模な建物群が計画的に配置された一画は、この農道の東半部にまでその範囲が及んでいることが明らかとなった。

このため調査記録の方法は、急速これまでの  $\frac{1}{500}$  の平板測量から、 $\frac{1}{500}$  の簡易透視方測量に変更し、第11次調査と同じ精度に切り換えた。そして、第11次調査の成果とあわせて11月4日に現地説明会を開催し、その成果を一般に公表した。

その後は実測・補足調査を行い、11月10日に一切の作業を終了した。

なお埋め戻し作業にあたっては山砂を入れ、造構の保存を図っている。

以下では造構を中心記述していく。



## ① 建物跡

第27図 S B150 建物跡

建物跡は3棟発見された（S B150～152）。第7次調査区での成果から、いずれも S D103・132溝の内部に計画的に配置された一連の建物跡と考えられる。

### SB150建物跡

桁行2間以上、梁行2間の南北棟で、S I 158住居跡と重複しており、東桁行のRはこの住居跡の床面下で検出された。

この建物跡は、S B140建物跡と桁行の柱筋をそろえ、さらにS B141建物跡とも西梁行の

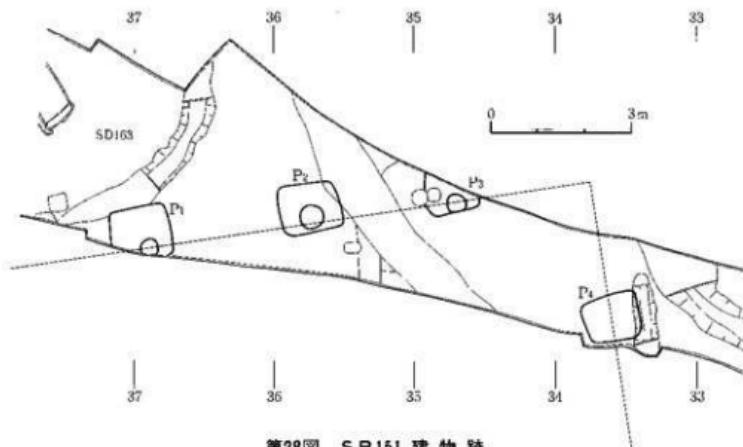
柱跡をそろえている。

柱穴は0.8m～1.3mの方形をなし、径25cm～32cmの柱痕跡が観察される。建て替えの痕跡は認められない。柱間寸法は、桁行が東側柱列で3.01m、南側柱列で2.84m、南梁行が3.05m+3.05m（総長6.10m）を計測する。

Rで実施した断割り調査によると、遺存状況は確認面から65cmの深さまで残っている。掘り方埋土は地山ブロックを主体とする互層である。出土遺物は無い。

なお、建物跡南東隅付近で柱穴が1個検出されているが、これとの関係は不明である。

#### SB151建物跡



第28図 SB151 建物跡

東西4間以上、南北2間以上の建物跡で、調査区の南側と西側へのびている。SX163円形周溝墓と重複しており、これより新しい。

柱穴は1.1m～1.3mの方形をなし、柱痕跡は径38cm～45cmを計測する。建て替えの痕跡は認められなかった。柱間寸法は、北側柱列のR・R間で3.63m+3.13mを計測する。

遺物は出土していない。

#### SB152建物跡

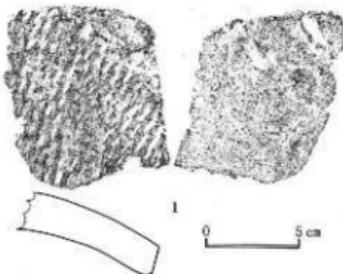
調査区の東端近くで、南北に並ぶ2個の柱穴を確認した（R・R）。

Rの東側には、これ以外にほぼ等間隔に並ぶ2個の柱穴が確認されているが、埋土の特徴がR・Rとは異なることから、同一建物跡の柱穴と断定することはできなかった。

Rで実施した断割り調査によると、この建物跡には2時期の変遷が認められる（SB152A・152B）。このうち新しい段階の柱穴は、1.8m×1.6mの方形をなし、柱痕跡は径48cmを計測す

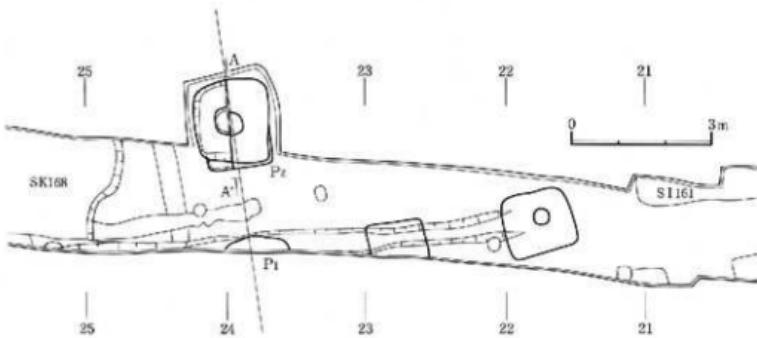
る。掘り方埋土は地山ブロックを主体とする互層である。このなかには焼土と炭が充満しており、また焼壁の細片も認められた。したがって火災後の修復である可能性もある。

出土遺物は、SB152B建物跡の掘り方埋土から、凸面に縫合目のある残瓦片が1点出土した(第29図)。

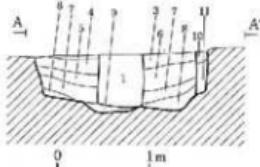


No.	種類	器種	出土遺物	層No.	堆		登録No.
					面	裏	
1	瓦	平瓦	SB152B	3	面目(単一)→ナゲ。	縫合目(複数)→凹凸の形態が複数のついた。	G-6

第29図 SB152B建物跡出土遺物



第30図 SB152 建物跡



層位	層No.	土色	土質	構造	分布	備考
1	1	灰黄褐色(10YR5/6)	シルト	SB152B	掘り方	やわらかく、しまりなし。砂礫混を若干含む。 しまりがある。
	2	黒褐色(10YR5/6)	シルト			褐色ブロック・褐色土ブロック・泥化物・植生・樹木を多量に含む。
	3	灰褐色(10YR5/6)	シルト			層No.3とは同じ土性であるが、やや色調が暗い。
	4	暗灰褐色(2.5YR5/6)	シルト			層No.4より褐色土上の置する割合が高い。しまりあり。
	5	暗灰褐色(2.5YR5/6)	シルト			層No.5より洗浄・脱色の度合いが少ない。しまりあり。
	6	暗褐色(2.5YR5/6)	シルト			大粒力強化ブロックを多量に混じる。植生・泥化物を若干含む。
	7	こぶい黄褐色(10YR5/6)	シルト			砂礫によって構成されており、固くしまっている。
	8	黄褐色(2.5YR5/6)	シルト			層No.8と層No.9とは同じ。特徴なし。
	9	黄褐色(2.5YR5/6)	シルト			細かな粒のブロックを多量に含む。しまりあり。
2	10	灰黄褐色(10YR5/6)	シルト	SB152A	掘り方	細かな粒のブロック・泥化土・泥化物を多量に含む。植生を若干認める。
	11	灰黄褐色(10YR5/6)	シルト			層No.11とは同じ。特徴なし。
3						

第31図 SB152建物跡柱穴断面図

## ② 住居跡

住居跡9棟発見された(S I 153~162)。

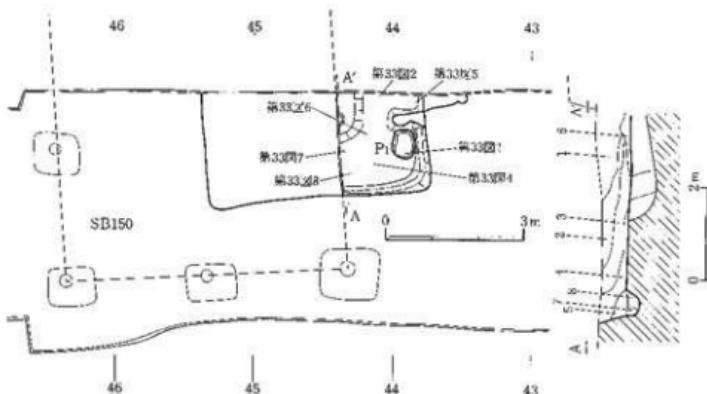
これらは検出状況から、SD 103・132溝の内側で発見された7棟(S I 155~162)と、外側で発見された3棟(S I 152~154)に大別される。このうちS I 158住居跡は、前述したSB 150建物跡を切って構築されている。方向は、大半が発掘基準線に対し南北方向でやや西に振るもので、第7次調査区と同様の傾向を示している。

以下では、精査を実施したS I 158住居跡について説明する。

### S I 158住居跡

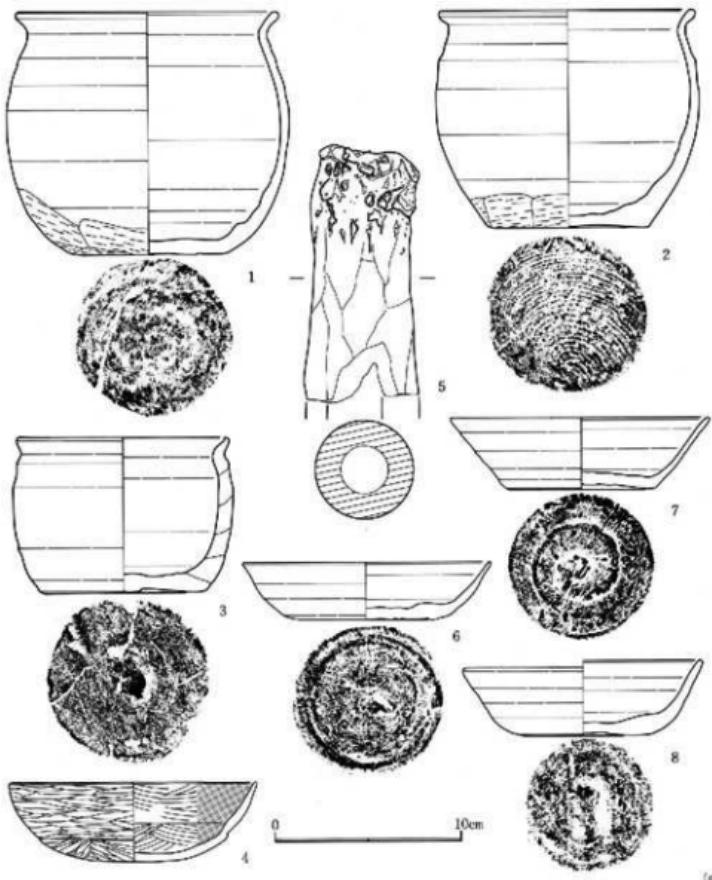
この住居跡はSB 150建物跡を切って構築されている。平面形は方形をなし、北半分は調査区外へひろがっている。精査は推定される床面積の1/4で実施した。

規模は東西が4.8mで、南北は2.3m以上ある。カマドは東壁中央に付設されている。燃焼部は白色粘土で構築されており、底面中央には支脚が据えられている(第33図)。煤道は92cmの長さがあり、先端には煙出しのピットが掘られている。柱穴は、精査を実施した範囲内では検出されていない。周溝は住居跡沿いを巡っており、プランの内側には壁に密着した状態で黒色土



第32図 S I 158 住居跡

層次	層号	土 色	土 質	分 布	備 考
1	1	黑 細 色(10Y R 5/6)	シルト	柱穴内	細かな地山粒を帶びり灰に混じる。
	2	暗 細 色(10Y R 5/6)	シルト		火候の違いを帶びり灰に混じる。
	3	黑 細 色(10Y R 5/6)	シルト		細かな地山粒を帶びり灰に混じる。
2	4	灰 黑 混褐色(10Y R 5/6)	シルト	柱穴内	均質、入人物がなく、しまりがない。
	5	黑 細 色(10Y R 5/6)	シルト		壁面を厚積している。しまりがある。
4	6	黑 細 色(10Y R 5/6)	シルト	柱隙内	壁面を厚積している。細かな地山粒をわずかに混じる。
	7	黑 細 色(2.5Y R 5/6)	シルト		壁面の底面。
5	8	暗 黑 黄 色(2.5Y R 5/6)	シルト		



No	種別	器種	出土 地點	編號	法 案	外 面			内 面			量 積 No	
						底 径	口 徑	高 度	口 部	体 部	底 部		
1	土師器	甕	S 1158	床	13.0	13.9	8.4	ロクロナデ 手持ちアズリ	ヨクロナデ 手持ちアズリ	ヘタ切り	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	D- 21
2	土師器	甕	S 1158	床	11.7	13.7	8.6	ロクロナデ 手持ちアズリ	ロクロナデ 手持ちアズリ	圓錐形切り	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	D- 22
3	土師器	甕	S 1158	床	8.4	11.3	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタ	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	D- 23
4	土師器	环	S 1158	床	4.3	13.2	—	I ガキニガキ	ケヌリミガキ	モチモチ	モチモチ	モチモチ	C- 56
5	土器	环	S 1158	床	長さ33.5cm 幅5.5cm	—	—	カマツの支柱として利用されている。外蓋はナゲ製體。溶解した鉄が付着。	—	—	—	—	P- 1
6	須恵器	环	S 1158	床	3.1	13.3	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタ	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	E-128
7	須恵器	环	S 1158	床	3.9	12.8	7.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタ	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	E-129
8	須恵器	环	S 1158	床	3.9	12.8	6.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタ	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	E-130

第33図 S 1158住居跡出土遺物

が帯状に認められた（第32図一点鎖線）。これは青森県青森市近野遺跡（青森県教育委員会：1975.3）での確認例から、壁板の痕跡と考えられる。またカマドの南脇には貯蔵穴が掘られている。

出土遺物は床面ならびに貯蔵穴から土師器壺1点・甕3点、須恵器壺3点が出土した（第33図）。いずれも完形品である。

### ③ 溝

溝は9条検出された（SD103・132、167～171）。このうちSD103・132溝は、第7・11次調査区で検出されていた北西コーナーからの西辺の延長で、計画的に配置された建物群を区画するものである。またSD165・167溝は、精査を実施していないため具体的な時期や性格を決定することはできないが、他との重複関係や堆積上の状況から、古代の遺構である可能性をもつている。以下ではこの4条について記述する。

#### SD103・SD132溝

第7・11次調査区の南側にあたる場所で検出され、北半で精査を実施した。この2条の溝は城柵内を区画するためのもので、ともに2時期の変遷がある。

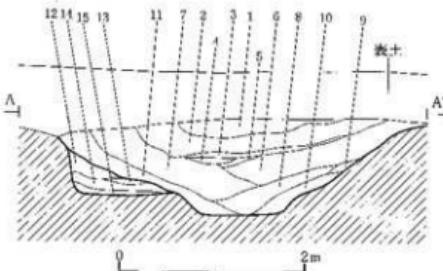
これによって西辺は、外側のSD

103溝で82m、内側のSD132溝で71

mまで確認された。

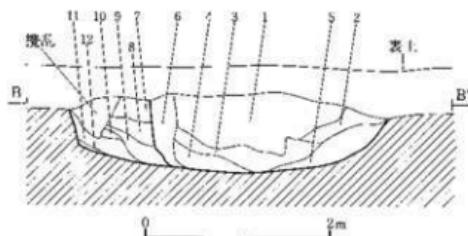
それぞれの特徴については、第11次調査の報告（本書）で既に記しているので、ここでは割愛する。

出土遺物は、大半がそれぞれの溝の新しい段階から出土した。うちわけは、土師器甕、須恵器壺・高台付壺・甕・甕・甕、平瓦である。



番号	層	土色	土色	造	備	考
1	1	に赤い黄褐色(10YR5/6)	シルト		やわらかく、しまりがない。	
2	2	黒 色(7.5YR4/6)	シルト		開削上。	
3	3	灰 白 色(2.5Y R4/6)			灰白色大山粘土。	
4	4	黒 褐 色(10YR4/6)	シルト			
5	5	黒 灰 色(10YR5/6)	シルト			
6	6	赤(7.5YR4/6)	シルト			
7	7	に赤い黄褐色(10YR5/6)	シルト		下部には砂礫が混じる。	
8	8	に赤い黄褐色(10YR5/6)	シルト		層No.7よりやや色調が暗い。砂礫が混じる。	
9	9	に赤い黄褐色(10YR5/6)	シルト			
10	10	に赤い黄褐色(10YR5/6)	シルト		下部に砂粒が混じる。	
11	11	黒 灰 色(10YR5/6)	シルト			
12	12	黒 灰 色(10YR5/6)	シルト		細かな地山紋を直角状に盛り立てる。	
13	13	黒 褐 色(10YR5/6)	シルト		形状で入出物を含む。	
14	14	黒 褐 色(10YR5/6)	シルト		均質で入出物を含まない。	
15	15	黒 灰 色(10YR5/6)	シルト		細かな地山紋をまだらに盛り立てる。	

第34図 SD103溝



層位	層號	上 色		土質	遺 積	特 記
		黒 植	色(10YR 5G)			
1	1	黒 植	色(10YR 5G)	SD 132B	シルト	やわらかく、しまりがない。地山粒、腐化物が混じる。
	2	こぼい黄褐色	(10YR 5H)		シルト	地山粒をまだらに混じえる。
	3	黑 細	色(10YR 5G)		シルト	地山ブロックと黒色上の薄い層が継続的に重なる。
	4	こぼい黄褐色	(10YR 5H)		シルト	地山細粒をわずかに混じえる。
	5	黑	色(10YR 5G)		シルト	やわらかく、しまりがない。
	6	黑 植	色(10YR 5G)		シルト	地質で遺生物が少ない。
2	7	暗 黑	色(10YR 5G)	SD 132A	シルト	地山ブロックをひっしりと混じえている。
	8	黑 細	色(10YR 5G)		シルト	薄かな地山ブロックが縦状に入る。
	9	こぼい黄褐色	(10YR 5H)		シルト	地山ブロックを徹底混じる。
	10	黑 細	色(10YR 5G)		シルト	地山ブロックを多少混じる。
	11	黑 植	色(10YR 5G)		シルト	大粒の地山ブロックを少量混じる。
	12	黑	色(10YR 5G)		シルト	

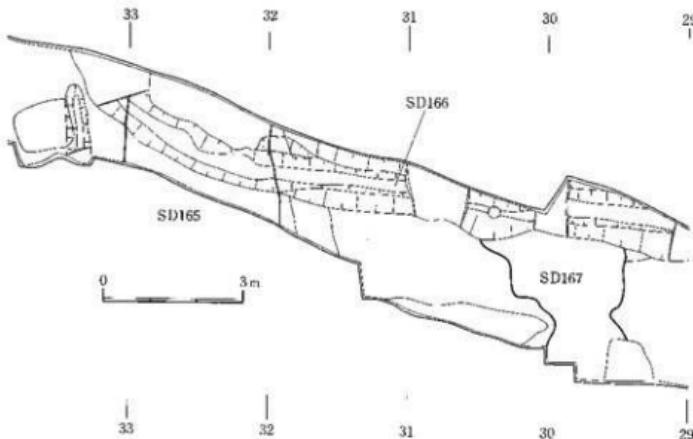
第35図 SD 132 溝

### SD165・167溝

この2条の溝は、5m～6mの間隔をおいて南北に並行して走っている。ともに周辺の重複する造構の中では、最も古い。

西側のSD 165溝は、上幅3.0m～3.1mである。堆積土は重複する溝から観察すると、黒色土と地山ブロックを多量に混じえる暗褐色土が交互に堆積している。

一方、東側のSD 167溝は、上幅1.7m～3.0mを計測する。堆積土中には焼土と炭が充満しており、このなかには土師器、須恵器、瓦など古代の遺物が多量に混じっている。



第36図 SD165・167溝

#### ④ 円形周溝墓

円形周溝墓は1基発見された(S X163円形周溝墓)。

##### SX165円形周溝墓

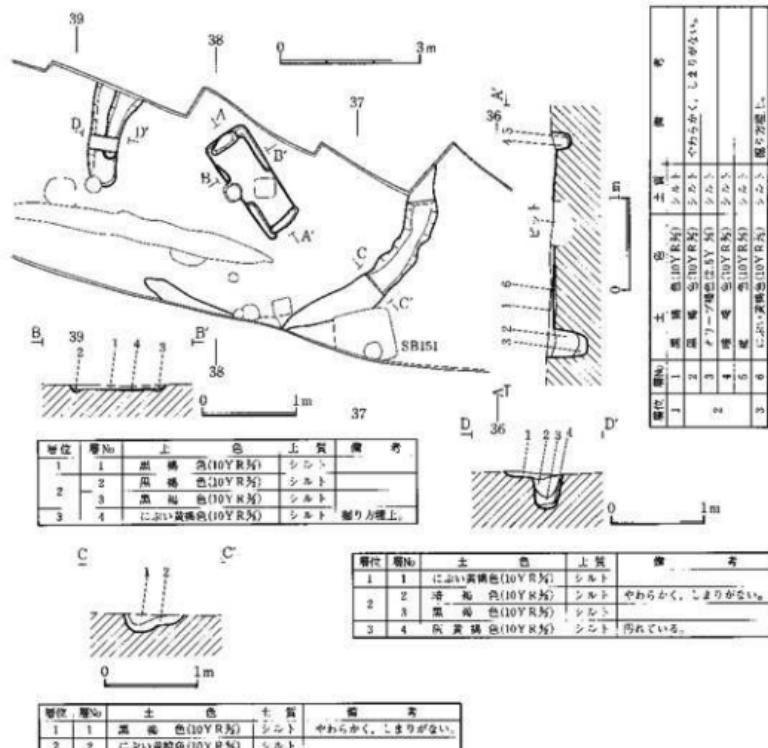
この周溝墓はS B 151建物跡と重複しており、これより古い。北西部の一部は調査区外へひろがっている。

周溝は、径が溝の外側で計測すると7.6mあり、南西部は一部絶切れている。底面の状態は一様でなく、確認面からの深さは15cm~42cmである。堆積土は自然流入したものとみられる。

上体部は周溝の中央部で検出された。遺存状況はきわめて悪く、南半は地山が露出している。平面形は南北に長い長方形をなし、短軸は北辺がいくぶん幅広い。方向は、発掘基準線に対し西へ33°振れている。規模は長軸が2.40mで、短軸は北辺が1.05m、南辺が0.85mを計測する。壁ぎわは溝状に深くなっており、とくに短軸ではこれが顕著であった(北辺35cm、南辺21cm)。棺材を埋設する際の掘り方の痕跡と思われる。

遺物はまったく出土していない。

この周溝墓は、時期の決定が困難であるが、本遺跡ではかつて塩釜式の底部穿孔の土師器壺が出土しており、遺跡内には周溝墓もしくは小規模な古墳の存在が予想される。こういった観点に立てば、本遺構あるいは近接するSD102・138円形周溝(第7・11次調査)は、古墳時代前期の墓である可能性をもつている。



第37図 SX163円形周溝墓

## 第14次調査

調査地 城生野地蔵堂

面 積 170m<sup>2</sup>

期 間 平成元年11月29日～12月8日

第13次調査を実施した田端前線では調査の進行状況にあわせて路線敷の西側から水道管の埋設工事を実施してきた。ところが第13次調査の結果、この農道の東半部は伊治城跡の主要な一画を横断していることが判明したため（本書）、当教育委員会では町水道課と造構の保存問題について協議を行った。その結果、造構の保存を優先し、東半部



第38図 第14次調査区位置図

については水道管の埋設場所を想定される区画の範囲外へ移動することで合意した。そこで田端前線のほぼ中央から南へ向かって走る農道地蔵堂線をあらたな埋設場所とし、ここで立合調査を実施することとなった。また、これとあわせて国道4号線の東側で施工された水道管理設工事についても立合調査を実施した。

立合調査はまず前述した田端前線から開始した。この一帯は、西側から入り込む沢地の頂部付近に位置している。このため、表土下にはグライ化した緑灰色の砂層が厚く認められ、きわめて不安定な地盤であることが確認された。

ところでSD103・132区画溝は、西辺が北辺に対していくぶん内側に振れて掘れていたが（第7・11次調査）、これを90°の方向に延長すると、西辺はこの地盤の悪い場所へ入り込んでしまう。したがって、区画の設計にあたっては、この点を考慮したのであろう。

一方、国道をはさんだ東側では、表土下に厚いロームの堆積が認められ、3ヶ所で住居跡と思われる落ち込みが検出された。

## VI 考 察

本年度は伊治城跡内で計5件の発掘調査を実施した（第10～14次）。このうち国庫補助事業計画にもとづく第11次調査は、昨年度の第7次調査で検出していた区画溝のひろがりとその内部に配置された遺構群の把握を目的として実施した。その結果、二重の区画溝の内側に計画的に配置された建物群が検出され、この場所が伊治城跡のなかでも重要な一画であることが明らかとなった。以下ではこれに関連する第13次調査の成果と共に、若干の考察を行いたい。

### 1. 各遺構の特徴と問題点

#### a) 摺立柱建物跡

本年度の調査で発見された建物跡は、S B140・141・150・151・152の5棟である。このうち前二者は第11次調査区で検出され、後三者は第13次調査で検出された。

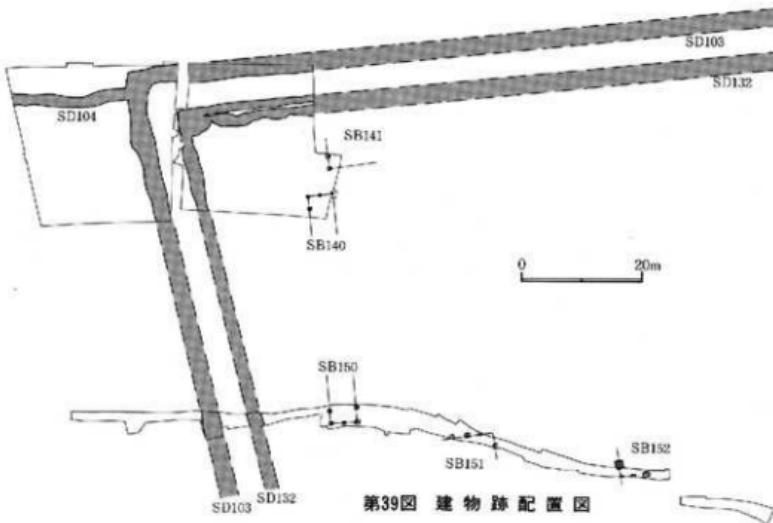
第2表 塗立柱建物跡一覧

遺構名	所 在	規 模		柱 穴	柱 高	出土遺物	文 題	調査次数	重 要 性
		幅	行						
S B140	南北溝	2間以上	2 両方 形	0.7m~1.1m	20cm~34cm	無し	1 時期	第11次	S D134-135-136溝に塗付してあり、これより古い。
S B141	東西溝	6 棚	2間以上	方 形	0.9m~1.2m	24cm~30cm	無し	1 時期	SD132溝に塗付してあり、これより古い。
S B150	南北溝	2間以上	2 両方 形	0.8m~1.3m	25cm~33cm	無し	1 時期	第13次	S D130溝に塗付してあり、これより古い。
S B151	小 溝	4間以上×2間以上	方 形	1.1m~1.3m	38cm~41cm	無し	1 時期	第13次	S K-63河内町溝に塗付してあり、これより新しい。
S B152	平 地	2 間 以 上	方 形	1.6m~1.8m	48cm	平瓦	2 時期	第13次	無し

これらの5棟の建物跡は、後述するS D103・132溝に周囲を区画されるもので、この区画溝の北辺に建物方向をほぼあわせている。このうち第11次調査で検出されたS B140・141建物跡は、東桁行と西梁行の柱筋をほぼそろえており、建物間の間隔もおおよそ20尺である。また、第13次調査で検出されたS B150建物跡も、桁行の柱筋をこの2棟とほぼそろえている。このことから、この3棟の建物跡の配置には計画性が認められ、同時に存在したと考えられる。

また、この他のS B151・152建物跡についても、ほぼ同一の建物方向をとって設計されていることから、一連のものとみなされよう。ただし、S B152建物跡には2時期の変遷が認められ、他の建物跡とは様相を異にしている。また、第13次調査区では組み合わせ不明の柱穴が幾つか検出されており、これらがどういった建物跡になるのか、まだ判然としない。

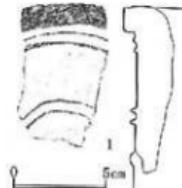
年代については、S B150建物跡を切って構築されているS I-158住居跡の出土遺物から下限を求めることが可能である。この住居跡では、床面上から土師器壺・甕・須恵器壺の7点の完形品が出土している（第33図）。個別的にみて行くと、まず土師器壺（第33図4）は、口縁部と体部の境に軽い段をもち、また内面にも稜が認められる。器面調整は内・外側ともにミガキで、内面には黒色処理が施されている。こういった特徴を具えた壺は、氏家和典氏が設定した国分寺下層式（氏家：1961.3）に該当する。一方土師器甕は、製作にあたってロクロが使用された



第39図 建物跡配置図

もので、表杉ノ入式（氏家：1957.3）に該当する。このうち中型の2点（第33図1・2）は、体部下半に再調整を受けており、同型式のなかでも比較的古い段階の要素を持っている。また、第33図3の小型甕は、色麻町上新田遺跡3号住居跡・宮崎町早風遺跡9号住居跡に類例があり、表杉ノ入式の初期に位置づけられる。さらに、須恵器環（第33図6・7・8）は法量・器形にややばらつきはあるが、いずれもヘラ切り無調整で、これまでの類例からすれば国分寺下層式から表杉ノ入式初期に伴うものである。

以上の検討から、この土器群には国分寺下層式から表杉ノ入式初期の特徴が認められ、実年代としてはおおよそ8世紀

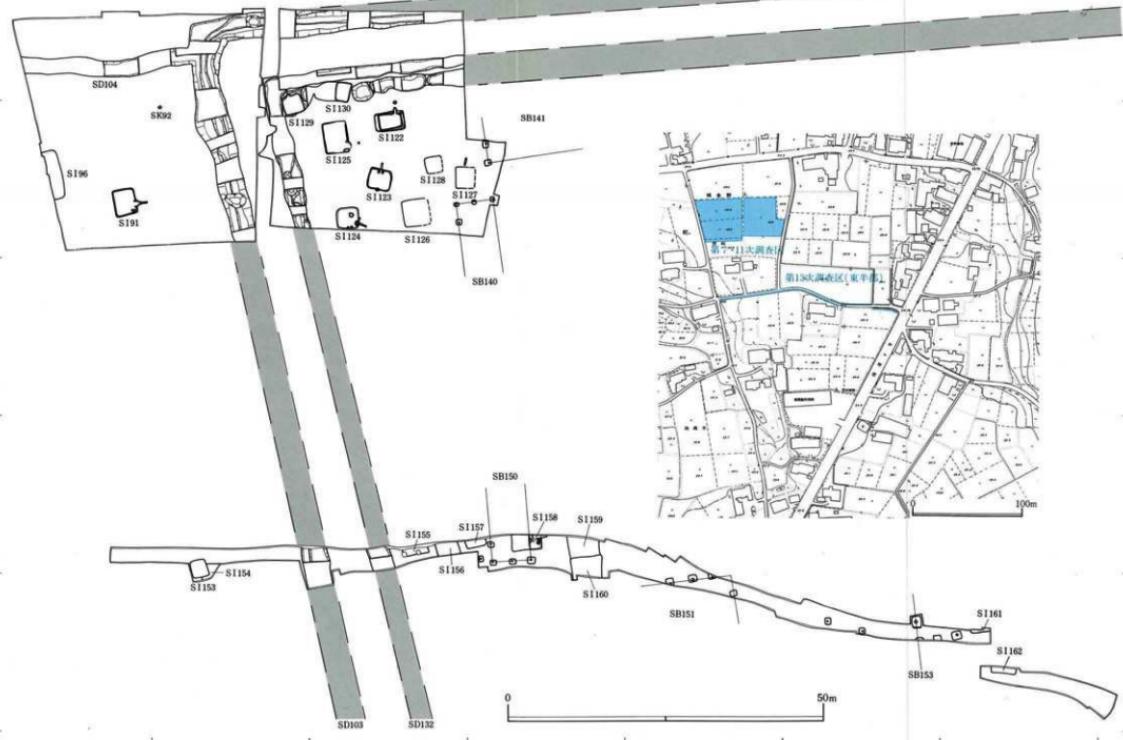


No.	種別	基標	出土遺構	層 No.	廣 距		發 緑 No.
					面	面	
1	瓦	野丸瓦	SK168	1	剥落してあり、不明。	無い場合による裏面。	下-3

第40図 SK168土壤出土重圓文軒丸瓦

後半から9世紀初頭までの年代が与えられる。したがって、建物群は少なくとも9世紀の初頭には廃絶していたと考えられる。

なお、この一帯はこれまでの調査区に較べると瓦の分布が濃密で、SB152B建物跡の掘り方埋土からは、平瓦片が出土した（第29図）。また、SK168土壤からは、これまで探集品でしか発見されていなかった重圓文軒丸瓦が1点出土している（第40図）。こういった状況から、これらの建物群のなかには瓦葺きのものが存在した可能性がある。



第41図 第7・11・13次調査区構成配置図

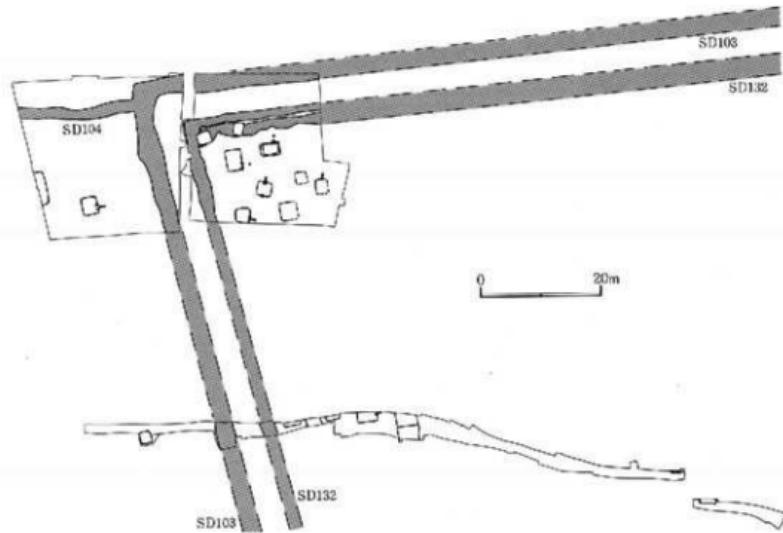
### b) 穂穴住居跡

穂穴住居跡は19棟検出された。これらは検出状況から、SD103・132区画溝の内側で検出された14棟、区画溝に重複する2棟、区画溝の外側で検出された4棟に大別される。方向は、大半が発掘基準線に対し南北方向で西に揃れるもので、強い齊一性が認められる。

精査を実施した9棟の住居跡は出土遺物の年代観（8世紀後半～9世紀初頭）から、いずれも伊治城跡にかかわるものと考えられる。また、未精査の住居跡も造構確認段階で出土した遺物から、同時期に営まれたものと予想される。

区画溝の内側に営まれた住居跡は、SB150建物跡を切って構築されているS1158住居跡を除いて、建物群との具体的な前後関係のわかるものは無い。これらの住居跡が建物群と同時に存在したとは思われないが、その位置づけについては、今後の課題である。また、建物群と相前後して重複する住居跡の調査例が増加すれば、伊治城跡における上器の細かな変遷をおさえることができる可能性もある。この点についても今後注意を払っておきたい。

区画溝と重複する2棟は、いずれもSD138溝の新しい段階（SD138B）と重複している。これらは堆積土の状況から、区画溝の改修時に短期間営まれた造構と推定される。性格として



第42図 穂穴住居跡分布図

は、区画溝のライン上に営まれていること、カマドの構造が本遺跡に一般的なものとは異なることから、区画施設の改修時に伴う工房のような性格を指摘しておきたい。

区画溝の外側に営まれた住居跡は、建物群との関係についてることはできなかった。

### c) 溝

溝は2条検出された（SD103・132）。これらは前述の計画的に配置された建物群の周囲を二重に区画するものである。まだ北西のコーナーが確認されたのみであるが、おそらく方形の区画をなすと思われる。ともに2時期の変遷が認められた。規模は、検出された北西のコーナーから計測すると、北辺は外側のSD103溝で41m、内側のSD132溝で30m、西辺は外側のSD103溝で82m、内側のSD132溝で71m以上のひろがりをもつ。西辺は、地盤の悪い場所を避けるため、北辺に対して90°よりやや内側へ掘って掘られている（註1）。

SD103溝は、新しい段階（SD103B）で上幅3.5m～5.0mを計測する。改修は古い段階の内側にやや重複して行われており、新しい溝の堆積土中には、灰白色火山灰（山田・庄子：1978.3）が認められる。出土遺物は大半がSD103B溝からのもので、住居跡と同じく8世紀後半から9世紀初頭の年代幅のなかにおさまるものが出土している。

一方、SD132溝は、外側のSD103溝に較べて規模が小さく、上幅は1.7m～2.0mを計測する。改修は古い段階の内側で行われており、西辺ではやや重複して、北辺ではわずかに隙間をおいて実施されている。出土遺物はSD132B溝に集中しており、内容はSD103B溝と同様である。

## 2. まとめ

本年度の調査の結果、第7・11・13次調査区を設定した場所は、計画的に建物群を配置し、その周囲を二重の溝で方形に区画していた場所と推定される。このことから、この一帯が伊治城跡のなかでもきわめて重要な一画であることは、確実であろう。以下ではその成果を簡単にまとめ、今後の指針としておきたい。

- ① 建物跡は5棟検出された。方向は区画溝の北辺にほぼあっており、このうちの3棟では柱筋をほぼそろえているのが確認された。このなかには瓦葺きの建物跡も存在したと推定される。
- ② 建物跡の周囲を巡る二重の溝は、方形の区画をなすと思われる。本年度の調査では北西のコーナーが検出され、外側の溝で北辺が41m、西辺が82mまで確認された。
- ③ この一画は、出土遺物の検討から、8世紀後半から9世紀初頭までの比較的短期間に機能していたと考えられる。

以上の調査成果をもとに、この場所の性格を考えると、伊治城の政庁跡とみるのが最も妥当であろう。しかし、今回の調査は断片的なもので、想定されるこの一画の大部分はまだ未調査域

として残されている。今後は、早急に区画全体の範囲を把握し、建物群の配置関係や細かな変遷などを解明して行かなければならぬ。

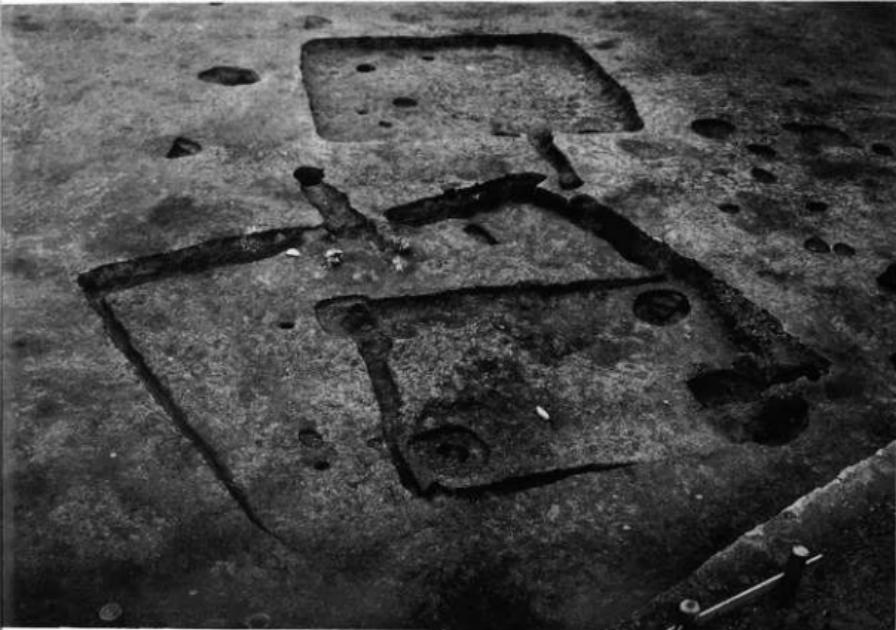
築館町では来年度からこの一画を5ヶ年計画で発掘調査して行く予定である。こういった問題点は、今後の調査成果の蓄積を待つて十分な検討を加えて行くことにしたい。

註1)：北辺がこの一画の基本的な区画の方向であることは、内部に配置された建物群の方向が、これにあわせて設計されていることからも明らかである。

## 参考・引用文献

- 加藤・伊藤（1955.3） 「宮城県登米郡新山村字対島駅六住居址群」『登米郡新山村史』
- 氏家 和典（1957.3） 「東北土師器の式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 氏家 和典（1961.3） 「上巣」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会
- 山道・三浦・成田 「近野遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 第22集 青森県教育委員会
- 小井川・高橋（1977.12） 「宮城県対島遺跡出土の土器」『宮城史学』第5分
- 宮城県多賀城跡調査研究所（1978.3） 「伊治城跡I」多賀城闇連跡発掘調査報告書第3冊 宮城県多賀城跡調査研究所
- 小井川・手塚（1978.3） 「櫛塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財報告書第53集 宮城県教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所（1979.3） 「伊治城跡II」多賀城闇連跡発掘調査報告書4冊 宮城県多賀城跡調査研究所
- 山山・庄子（1980.3） 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究年報1979-昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所
- 宮城県多賀城跡調査研究所（1980.3） 「伊治城跡III」多賀城闇連跡発掘調査報告書第5冊 宮城県多賀城跡調査研究所
- 小井川和夫（1981.3） 「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集 宮城県教育委員会
- 手塚 均（1981.3） 「鍋ノ丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集 宮城県教育委員会
- 丹羽・岡部・小野寺（1981.3） 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集 宮城県教育委員会
- 森 貞喜（1980.3） 「平鹿遺跡発掘調査報告書」宮城県宮崎町文化財調査報告書第3集 宮崎町教育委員会
- 丹羽 茂（1985.3） 「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集 宮城県教育委員会
- 高橋 守克（1987.3） 「須恵繩塚遺跡」河南町文化財調査報告書第1集 河南町教育委員会
- 築館町教育委員会（1988.3） 「伊治城跡 昭和62年度発掘調査概要一」築館町文化財調査報告書第1集 築館町教育委員会
- 築館町教育委員会（1989.3） 「伊治城跡 昭和63年度発掘調査概要一」築館町文化財調査報告書第2集 築館町教育委員会

# 写 真 図 版



図版1 (第10次調査区)

上: S1113-114-115住居跡(南から)

下: S1113-114-115住居跡(東から)

図版2 (第10次調査)



S1112住居跡 (北西から)



S1112A住居跡カマド  
(南から)



S1112B住居跡カマド  
(西から)



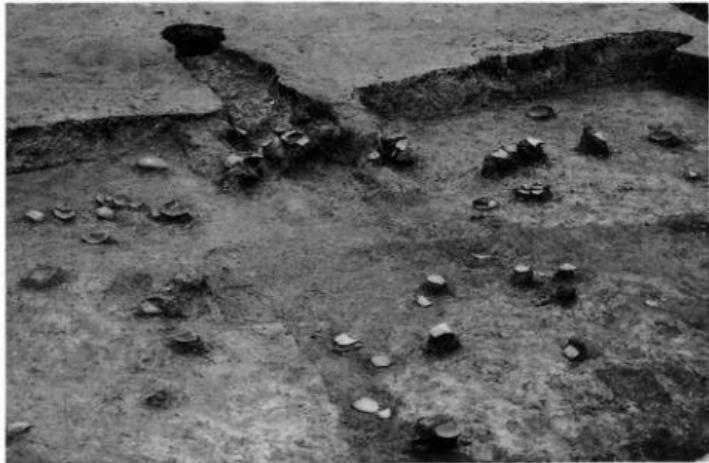
SII122B住居跡  
床面遺物出土状況



SII113住居跡 (南から)



SII113住居跡  
床面遺物出土状況 (北西から)



S1114住居跡  
床面遺物出土状況  
(南西から)



S1114住居跡  
カマド遺物出土状況  
(南から)



S1114住居跡  
床面遺物出土状況  
(西から)

図版5 (第10次調査)



S1114住居跡  
床面遺物出土状況(西から)



S1114住居跡  
床面遺物出土状況(西から)



S1115住居跡  
カマド付近遺物出土状況(北西から)

図版6（第11次調査）

第11次調査区全景(西から)



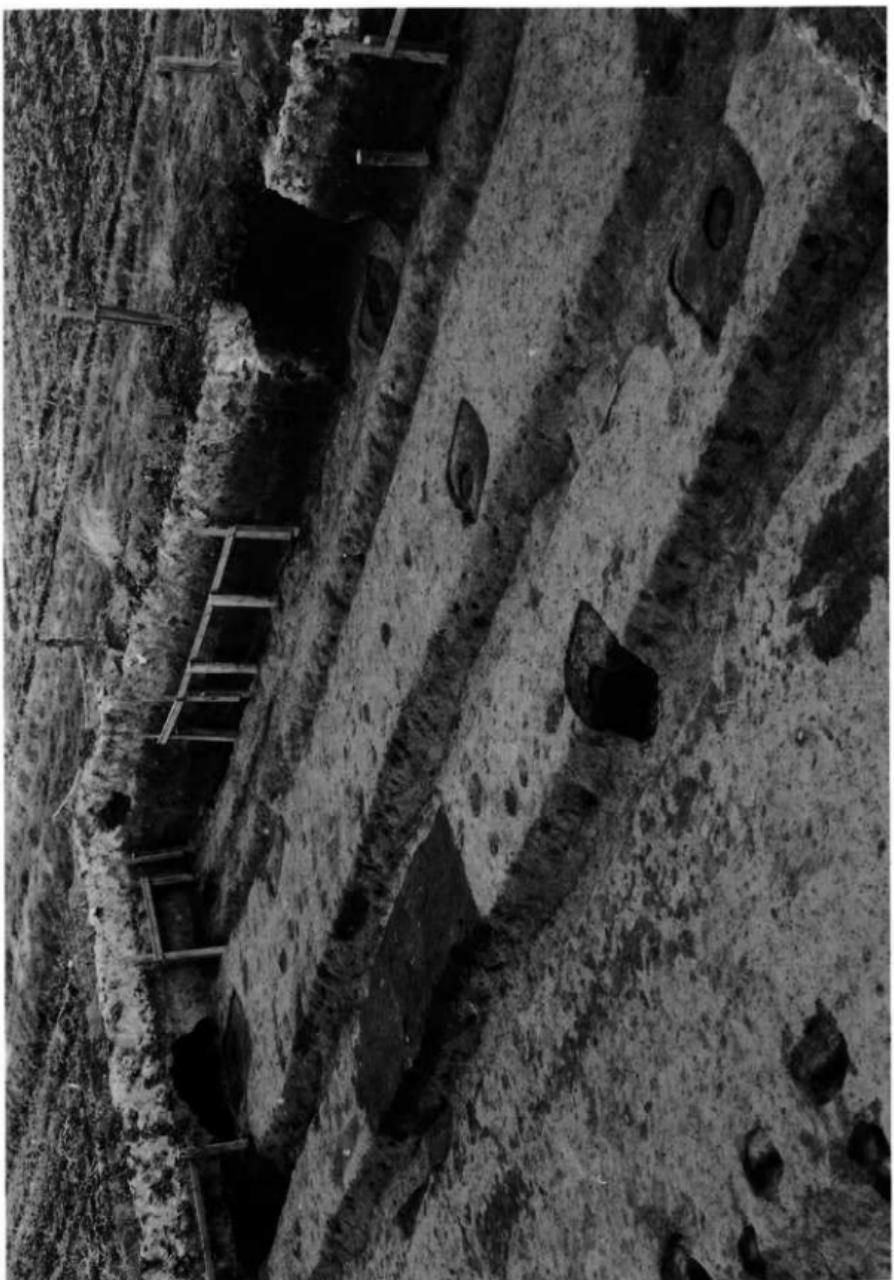
図版7 (第11次調査)



上: SD132溝(東から)

下: SD103溝(西から)







図版 9 (第11次調査)

上: SB140建物跡(南西から)  
下: SB141建物跡(南東から)

図版10 (第11次調査)



SI1123住居跡 (南から)



SI1123住居跡  
第3層上面遺物出土状況  
(南から)



SI1123住居跡  
円面鏡出土状況(南から)

図版11 (第11次調査)



SII122住居跡 (南から)



SII129住居跡 (西から)



SII130住居跡 (南から)

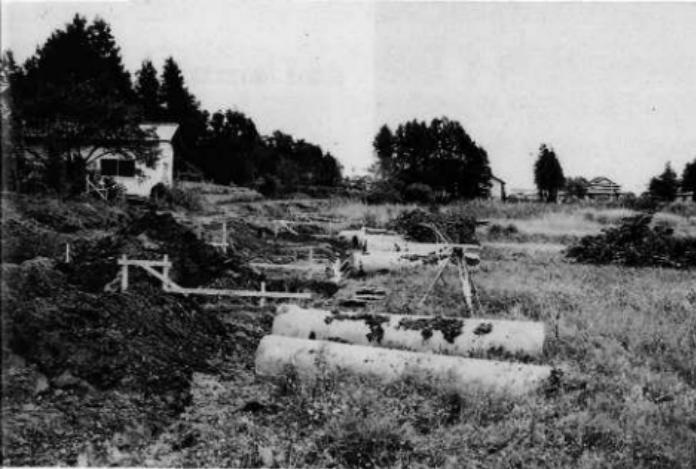


上：古墳時代前期溝遺物  
出土状況（北から）

下：古墳時代前期溝全景  
(南西から)



図版13 (第13次調査)



西半部遠景(西から)



西半部遺構外出土  
墨書き土器「肩」

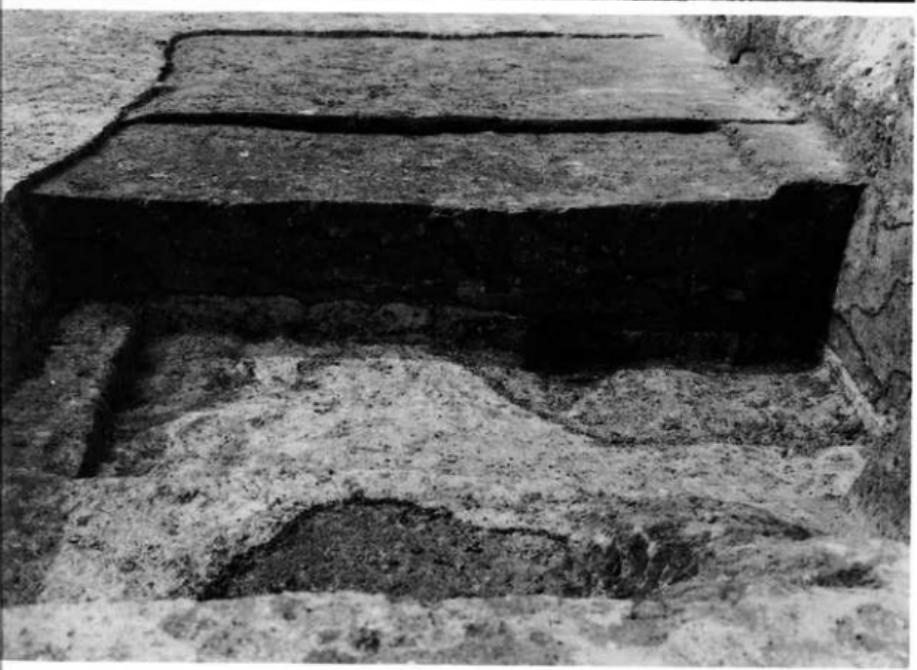


西半部遺構外出土  
墨書き土器「肩」



図版14 (第13次調査)

上: SD103・132溝検出状況(南東から)  
下: SD103溝(南西から)



図版15 (第13次調査)

72

上: SB150建物跡(東から)  
下: SB150建物跡Ps検出状況



図版16 (第13次調査)

上: SB151建物跡(東から)  
下: SB152建物跡(西から)

図版17（第13次調査）



S1158住居跡  
床面遺物出土状況（南西から）



SX163円形周溝墓（南東から）



SD165+167溝（東から）

---

築館町文化財調査報告書 第3集

伊治城跡

—平成元年度発掘調査概報—

印 刷 平成2年3月20日

発 行 平成2年3月31日

発行 築館町教育委員会  
宮城県栗原郡築館町東岸三丁目61

印刷 南部屋印刷株式会社  
宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36

---

